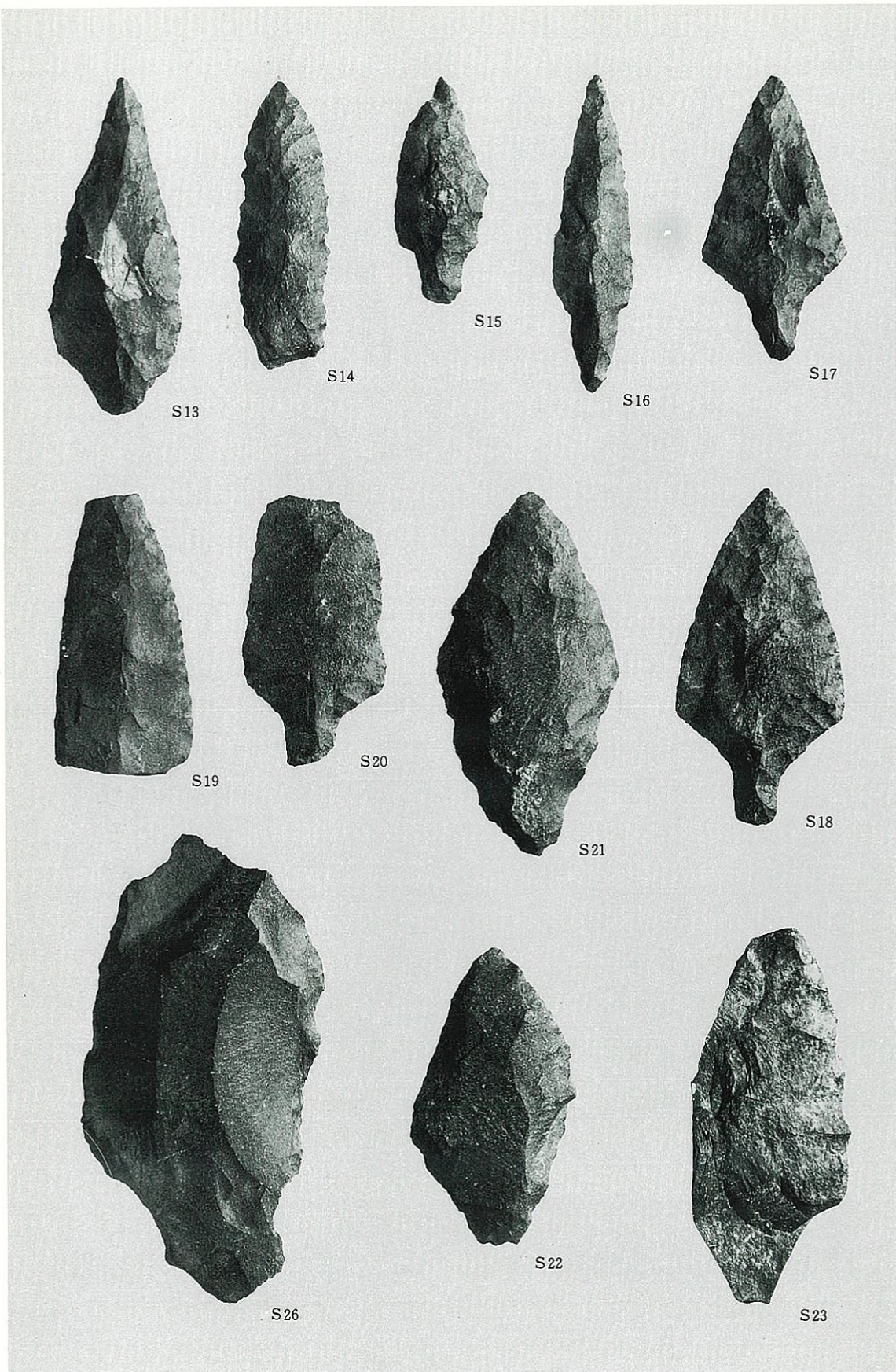
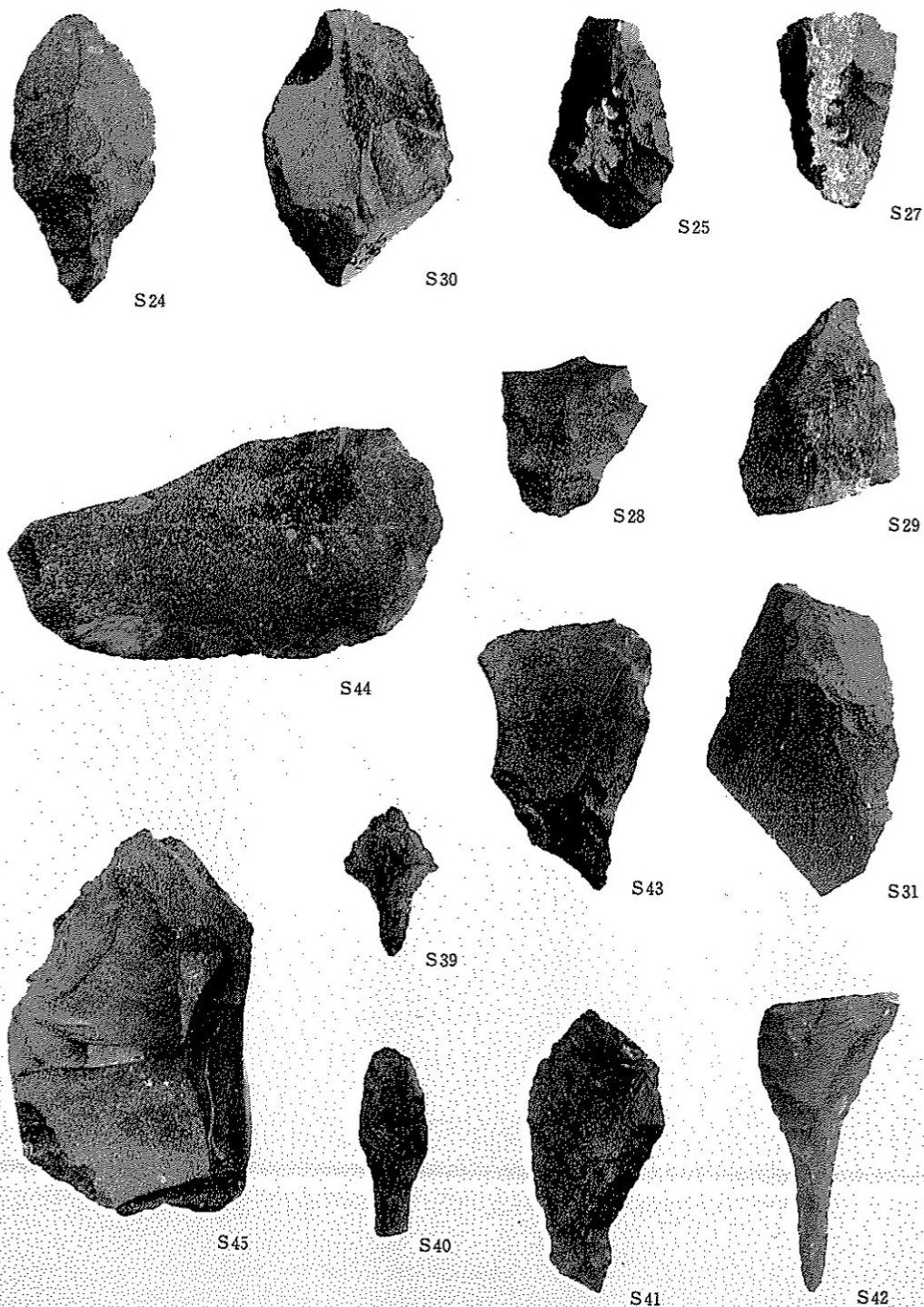


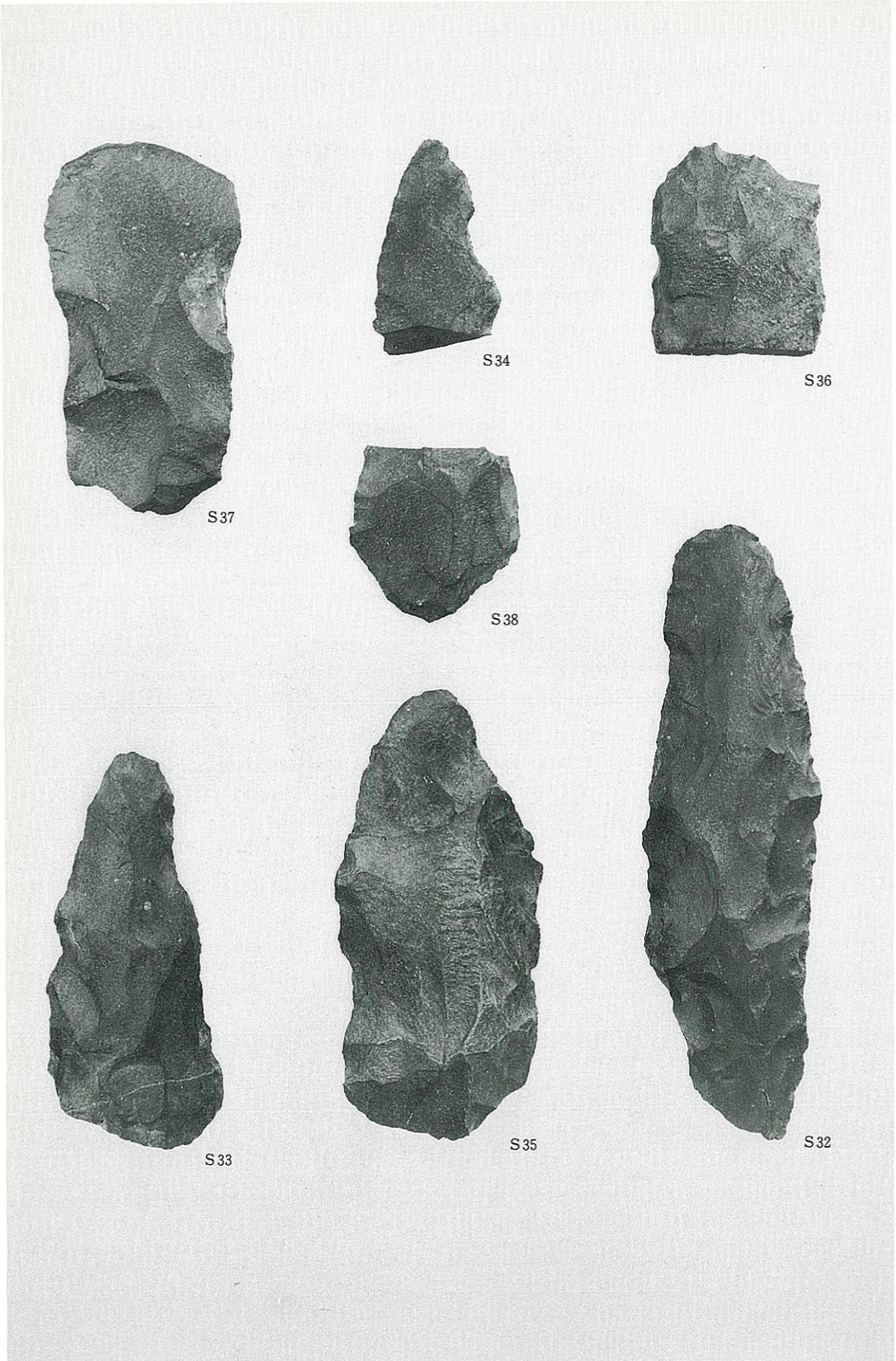
B、Cトレンチ出土の石器



Dトレンチ出土の石器(1)



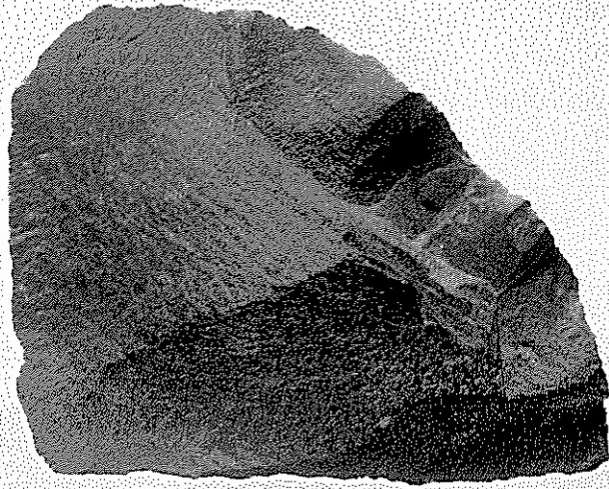
Dトレンチ出土の石器(2)



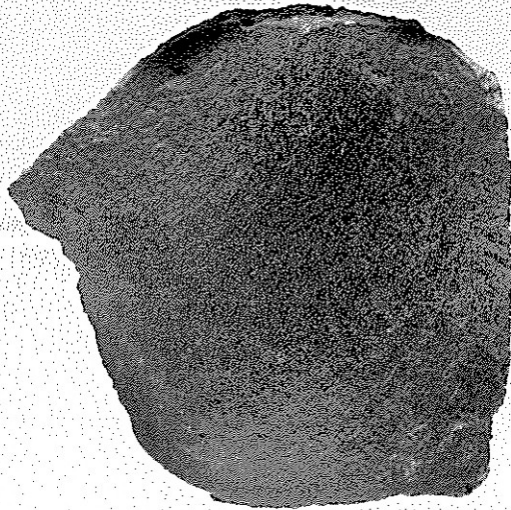
Dトレンチ出土の石器(3)



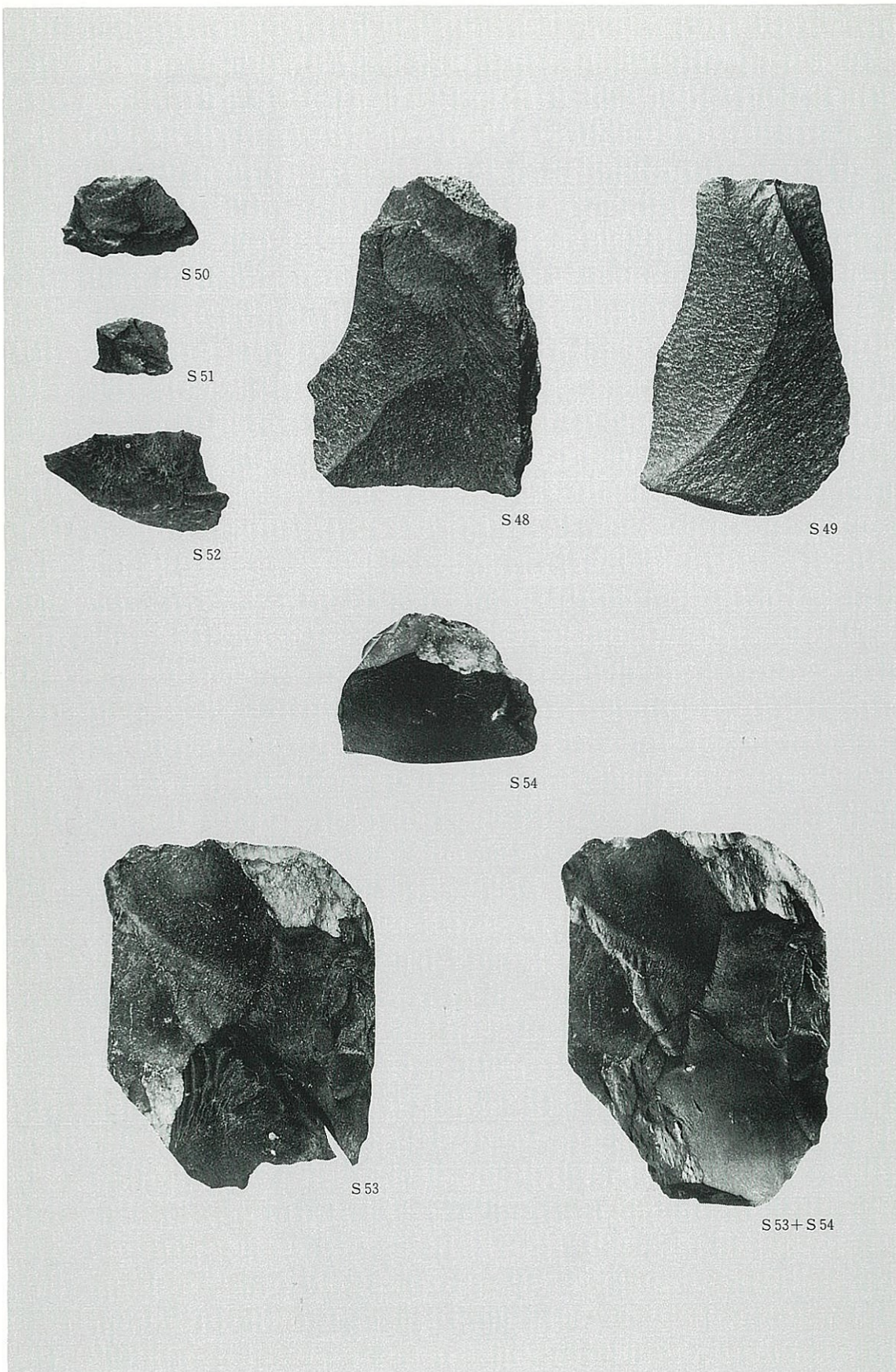
S46+S47



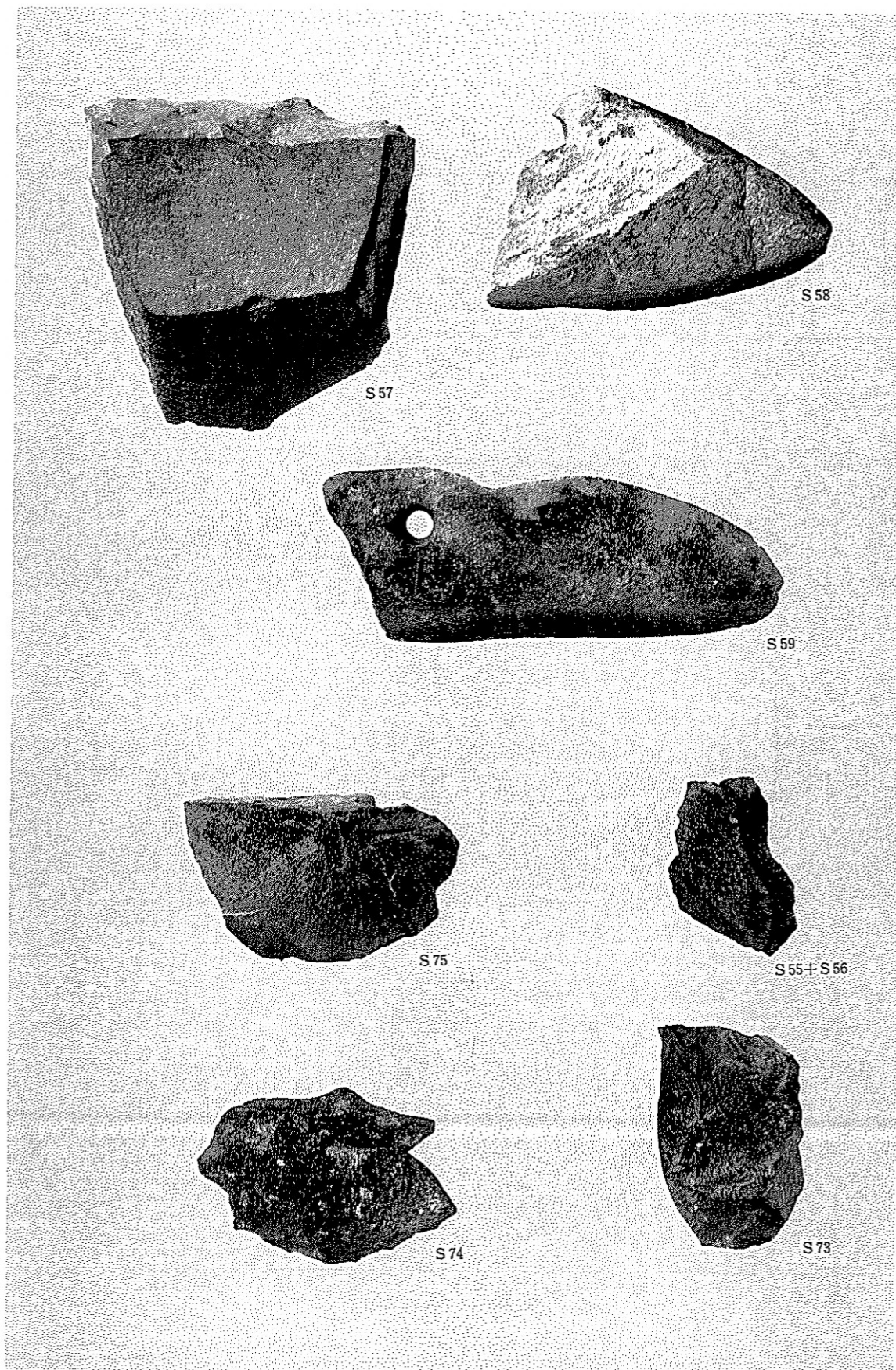
S47



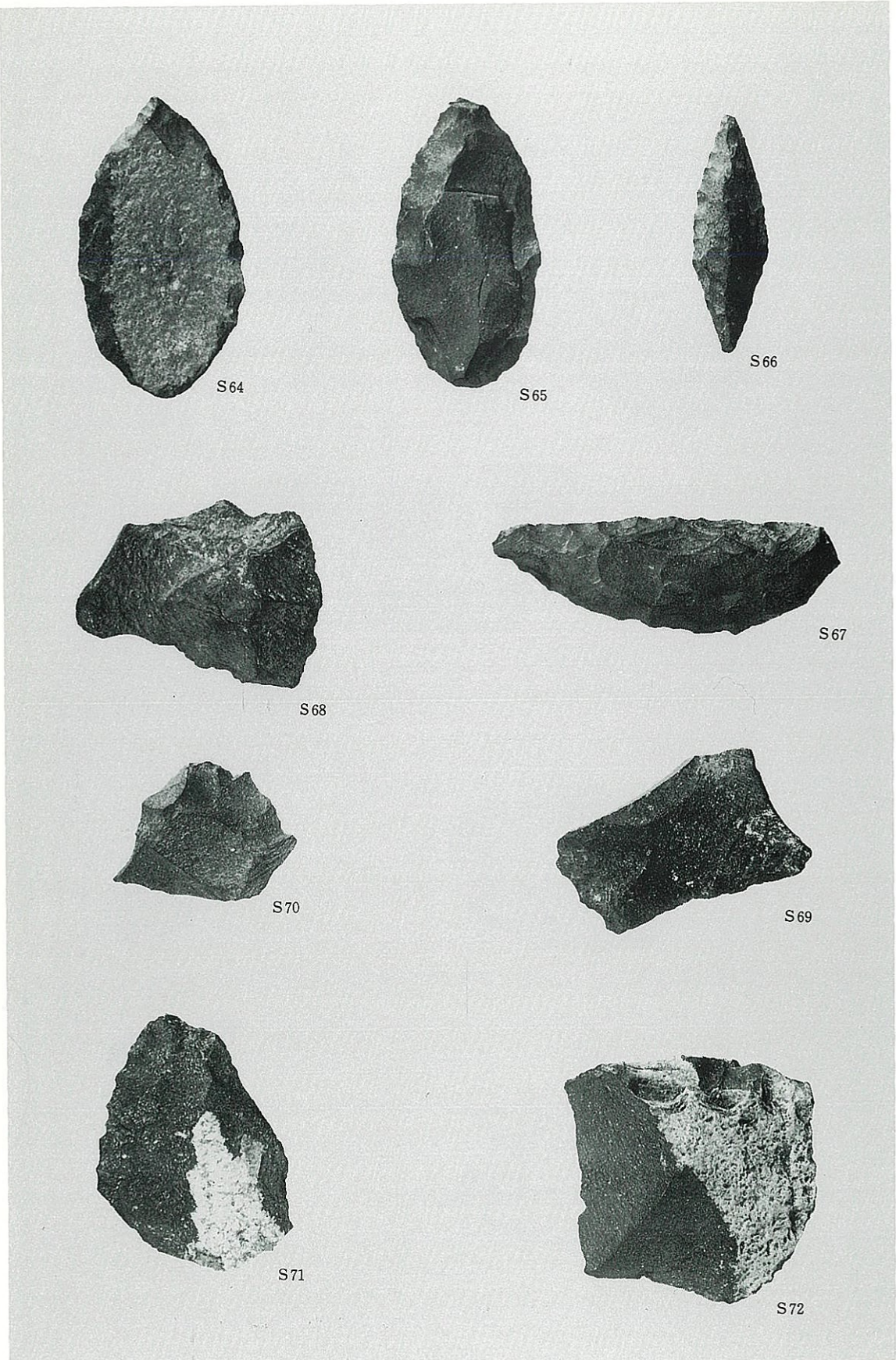
S46



Dトレンチ出土の石器(5)



Dトレンチ出土の石器(6)：S73～S75はサヌカイト集積ピット2出土



サヌカイト集積ピット2出土の石器

第3節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土土器胎土の砂礫観察

八尾市立刑部小学校教諭 奥田 尚

1. はじめに

個体確認ができる完形品150試料の表面に見られる砂礫の観察をした。裸眼で全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察事項は砂礫種、粒径、粒形、量の4項目である。岩石種については、更に詳しく、造岩鉱物、構成鉱物について観察した。観察された岩石種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、泥岩、チャート、結晶片岩、火山ガラスで、鉱物種は石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石、輝石である。花崗岩としたものは、石英・長石、石英・黒雲母、長石・黒雲母がかみ合った岩片であり、花崗閃緑岩や石英閃緑岩の可能性もあるが、便宜上、花崗岩とした。また、閃緑岩としたものは、石英・角閃石、長石・角閃石がかみ合った岩片であり、角閃石花崗岩の可能性もあるが、便宜上、閃緑岩とした。粒径は裸眼の場合、粒径が2mm以上を粗粒、2mm未満0.5mm以上を中粒、0.5mm未満を細粒とした。実体鏡下での場合、粒径が1mm以上を粗粒、1mm未満0.5mm以上を中粒、0.5mm未満0.2mm以上を細粒、0.2mm未満を微粒とした。粒形は角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。量は個数的に、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅かの5段階に区分した。

2. 砂礫種について

砂礫種について述べる。

花崗岩：色は灰白色、灰色で、粒形が角礫、亜角礫である。造岩鉱物のかみ合わせは、石英・長石、石英・黒雲母、長石・黒雲母である。

閃緑岩：色は灰白色、灰色、暗灰色で、粒径が角礫、亜角礫である。造岩鉱物のかみ合わせは、長石・角閃石、石英・長石・角閃石、石英・角閃石である。

流紋岩：色は黒色、白色、淡赤褐色で、粒形が角礫、亜角礫である。石基は玻璃質で、細粒の石英が点在する場合がある。

砂岩：色は灰色、褐色で、粒形が亜角礫、亜円礫である。砂粒は細粒である。

泥岩：色は、灰色で、粒形が亜円礫である。

チャート：色は白色、灰白色、灰色、暗灰色、黒色、赤色、赤褐色である。粒形は角礫、亜角礫、亜円礫である。

結晶片岩：色は白色、灰色、黒色で粒形は角礫、亜角礫、亜円礫である。石英片岩、絹雲母片岩である。

火山ガラス：色は黒色、無色で、透明である。粒形は貝殻状、半筒状、フジツボ状である。

石英：無色透明、白色透明で、粒形が角礫、亜角礫である。六角両錐形を示す場合がある。

長石：白色、白色透明で、粒形が角礫である。

黒雲母：色は黒色、金色で、金属光沢がある。板状、粒状である。

白雲母：無色透明で、光沢がある。板状である。

角閃石：色は黒色で、粒形が粒状、柱状の角礫である。結晶面には黒色の金属光沢がある。柱状の場合、自形であるものがある。

3. 類型区分

土器胎土に含まれる砂礫構成をもとに、類型区分をした。区分基準について述べる。

第1表 類型区分基準表

砂礫種 類型	花 崗 岩	閃 緑 岩	流 紋 岩	砂 岩	泥 岩	チャ ート	結 晶 片 岩	火 山 ガ ラ ス	石 英	長 石	黒 雲 母	白 雲 母	角 閃 石	輝 石
I							○		○	○	○	○	○	
II a	△	△							○	○	△		○	
II b									○	○			○	
III a	△	△	△					△	○	○	△		○	
III b	△	△				○			○	○	△		△	
III c	△	△	△						○	○	△			
IV a				△	△	○			○	○			△	
IV b	△	△		△		○			○	○	△		△	
V a	△	△						△	○	○	△		○	
V b	△	△				△		△	○	○	△		○	
VI							○	○	○	○	△		○	○
VII	△	△	△			○		△	○	○	△	△	○	
VIII			○	△					○		△		△	

○印は含まれる。 △印は含まれることもある。 空白は含まれない。

I 類型：花崗岩類起源と推定される砂礫、碎屑岩類、結晶片岩が含まれる。

II 類型：花崗岩類起源と推定される砂礫のみからなる。角閃石が裸眼でも認められ、量が多い。

石英が裸眼で認められない。 II a 類型

石英が裸眼で認められる。 II b 類型

III 類型：花崗岩類起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩類がごく僅かに認められる場合がある。角閃石は細粒で少ないか、認められない場合がある。

角閃石がごく僅かに含まれる。 III a 類型

チャート、砂岩等の碎屑岩類がごく僅かに含まれる。 III b 類型

角閃石が認められない。 III c 類型

IV 類型：花崗岩類起源の砂礫、碎屑岩類が認められる。角閃石は少なく、チャートが比較的多い。

チャートが比較的多く含まれる。 IV a 類型

チャートが僅かに含まれる。 IV b 類型

V 類型：花崗岩類起源の砂礫を主とし、碎屑岩類が認められる。石英と角閃石に自形が認めら

凡 例

視眼=視眼観察 視眼観察による記号：L=粒径2mm以上 M=粒径2mm未満 0.5mm以上 S=粒径0.5mm未満 ◎=量が非常に多い ○=量が多い □=量が少い △=量が極少 ×=量がごく僅か
 30倍=実体鏡の倍率の30倍 実体鏡下での記号：L=粒径1mm以上 M=粒径1mm未満 0.5mm以上 S=粒径0.5mm未満 0.2mm未満 SS=粒径0.2mm未満 顆は視眼と同じ --=以下の粒径がある
 E=自形あるいは結晶面のあるものが含まれる W=白雲母が含まれる
 観察表には欄の都合で記入出来なかつたが、他に、砂岩がNo31、No34、No37、No73、No87、No122、No124、No159、No170に、泥岩が、No37に認められる。

試料 番号	岩										鉱										焼土塊	器種 類型						
	花崗岩		閃緑岩		斑 岩		流紋岩		チャート		結晶片岩		火山ガラス		石 英		長 石		雲 母				角 閃 石		輝 石			
	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼			30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼	30倍 視眼		
14																												
15	L-△	L×																										
16																												
17																												
18																												
19	M-△	M×																										
20																												
21																												
22	L×	M																										
23	L×	M×																										
25	L×	M×																										
26	M×	M-△																										
27		M																										
28		L△																										
29		M△																										
30	L×																											
31	L×	L△																										
32		M×																										
33																												
34																												
35	L-△																											

れる。

碎屑岩類が認められない。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ V a 類型

チャート等の碎屑岩類が認められる。・・・・・・・・・・・・・・・・・・ V b 類型

VI 類型：結晶片岩が認められ、角閃石が自形で、輝石が認められる。

VII 類型：花崗岩類起源の砂礫、碎屑岩類が認められる。チャートが比較的多く、角閃石が中～僅かである。

VIII 類型：花崗岩類起源の砂礫を主とし、玻璃質流紋岩が比較的多い。

IX 類型：I 類型～VIII 類型のいずれにも属さない砂礫構成である。

不 能：胎土中に認められる砂礫量が少なく、類型区分をするには量的に少ないものである。

4. 各類型の砂礫構成

I 類型～VIII 類型の砂礫構成について述べる。

I 類型：構成砂礫種は結晶片岩、石英、長石、白雲母、黒雲母、角閃石である。結晶片岩は黒色、白色で、亜角礫、亜円礫である。石英片岩、絹雲母片岩である。粒径は 1 mm～10mm で、量が多い。粗粒のものが多く、細粒は僅かである。石英は白色透明、亜角礫である。粒径は 0.5mm～1 mm で、量が多い。長石は白色、亜角礫である。粒径は 0.2mm～1 mm で、量が多い。白雲母は無色透明、板状である。粒径は 0.2mm～0.5mm で、量が僅かである。黒雲母は金色、板状である。粒径は 0.5mm～1 mm で、量が僅かである。角閃石は黒色、亜円礫である。粒径は 0.2mm 以下で、量が僅かである。

II 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英、長石、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰白色、角礫である。粒径は 1 mm～5 mm で、量がごく僅か～僅かである。閃緑岩は灰白色、角礫である。粒径は 0.5mm～1 mm で、量がごく僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは長石・角閃石である。石英は無色透明、角礫である。粒径は 0.2mm～1 mm で、量がごく僅か～僅かである。長石は白色で、角礫、亜角礫である。粒径は 0.2mm～1 mm で、量がごく僅か～僅かである。黒雲母は黒色、金色で、板状である。粒径は 1 mm 以下で、量がごく僅か～多いである。角閃石は黒色、粒状である。粒径は 0.2mm～2 mm で量が非常に多い。II a 類型と II b 類型は石英が裸眼で認められるか、認められないかによって区分したのみである。

III 類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英、長石は全ての試料に含まれる。花崗岩は灰白色、灰色で、角礫である。粒径は 1 mm～3 mm で、量がごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは石英・長石、石英・黒雲母である。閃緑岩は暗灰色、角礫である。粒径は 0.5mm～2.5mm で、量はごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは石英・長石・角閃石、石英・角閃石である。流紋岩は白色、淡赤褐色で、亜角礫である。粒径は 1mm で、量がごく僅かである。石基は玻璃質で、石英の斑晶が点在する。砂岩は灰色、亜角礫である。粒径は 1 mm で、量がごくごく僅かである。砂岩の砂粒は

試料番号	岩											石								物										土塊	器型	種類												
	花崗岩	閃緑岩	斑瀾岩	流紋岩	チャート	結晶片岩	火山ガラス	石	英	長	石	雲	母	角	閃	石	輝	石	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡	鏡															
	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	69	70	71											
	二	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号	号											
	M△																																											

細粒である。チャートは赤褐色、灰白色、灰色、暗灰色、黒色である。亜円礫が多く、角礫、亜角礫は僅かである。粒径は0.5mm～5mmで、量のごく僅か～僅かである。火山ガラスは黒色透明、無色透明で、半筒状、フジツボ状、貝殻状である。粒径は0.2mm～1mmで、量のごく僅か～僅かである。石英は灰白色透明、無色透明で、角礫が多く、亜角礫が僅かである。粒径は0.2mm～2.5mmで、量が僅か～多いである。長石は白色で、角礫が多く、亜角礫は僅かである。粒径は0.5mm～3mmで、量のごく僅か～多いである。黒雲母は黒色、金色で、板状である。粒径は2mm以下で、量のごく僅か～多いである。角閃石は黒色で、粒状、柱状である。粒径は0.2mm～1mmで、量のごく僅か～僅かである。当遺跡付近の砂礫にはチャートや角閃石のごく僅か～僅かに含まれる場合もあることから、角閃石が含まれ、チャートが含まれない場合をⅢa類型、チャートが含まれる場合をⅢb類型、角閃石が含まれない場合をⅢc類型とした。

Ⅳ類型：構成砂礫種は花崗岩、砂岩、泥岩、チャート、石英、長石、黒雲母、角閃石である。チャート、石英、長石は全ての試料に含まれる。花崗岩は灰白色、灰色で、角礫、亜角礫、亜円礫である。粒径は1mm～5mmで、僅かである。砂岩は褐色で、亜円礫である。粒径は0.2mm～0.5mmで、量が僅かである。泥岩は灰色で、亜円礫である。粒径は1mm～1.5mmで、量が中である。チャートは白色、灰色、暗灰色、赤褐色で、亜角礫である。粒径は0.5mm～4mmで、量のごく僅か～僅か、多いである。石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～5mmで、量が中である。長石は白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量が僅かか多いである。黒雲母は黒色、金色で、板状である。粒径は0.5mm～2mmで、量のごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm～0.5mmで、量のごく僅か～僅かである。チャートが多く含まれる場合をⅣa類型に、チャートが比較的少ない場合をⅣb類型にした。Ⅳb類型はⅢb類型に類似するが、チャートの量が比較的多い。

Ⅴ類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英、長石、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量のごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは石英・長石である。閃緑岩は暗灰色で、角礫である。粒径は0.5mm～1mmで、量のごく僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは石英・角閃石、長石・角閃石である。角閃石は柱状で自形の場合がある。流紋岩は黒色で、亜角礫である。粒径は0.5mm～1mmで、量が僅かである。チャートは暗灰色、暗赤褐色で、角礫、亜角礫である。粒径は1mm～2mmで、稀に6mmに及ぶ。量のごく僅か～僅かである。火山ガラスは黒色、無色透明で、貝殻状、フジツボ状である。粒径は0.2mm～1mmで、量のごく僅か～僅かである。石英は無色透明、角礫である。粒径は0.2mm～2mmで、量が僅か～多いである。複六角錐形の高温型石英が認められる。長石は白色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm～1mmで、量のごく僅か～多いである。黒雲母は金色、黒色で、板状である。粒径は1mm以下で、量のごく僅か～多いである。角閃石は黒色で、粒状、柱状の角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm～1mmで、量のごく僅か～多いである。角閃石には柱状で自形のものが僅かではある

観察表 その3

試料 番号	岩										石										鉱物										磁土塊	器種 類型
	花崗岩 30倍	閃緑岩 30倍	斑銅岩 30倍	流紋岩 30倍	チャート 30倍	結晶片岩 30倍	火山ガラス 30倍	石英 30倍	長石 30倍	雲母 30倍	角閃石 30倍	輝石 30倍	輝石 30倍	雲母 30倍	角閃石 30倍	輝石 30倍	輝石 30倍	角閃石 30倍	輝石 30倍	磁土塊	器種 類型											
S 72	M-O				L-Δ			M-O	L-O	S	L-O	M-Δ	L-Δ															無	小鉢 IX			
X 73								M-Δ	L-O	S	M-Δ	L-O	S															無	鉢 Va			
3 74	L-Δ				L			L-Δ	L-O	M-Δ	M-Δ	M-Δ	S															無	鉢 IIIb			
75	M ×							M ×	M ×	M ×	M ×	M ×	M ×															無	皿 IIIa			
S 76	M-Δ							M ×	M ×	M ×	M ×	M ×	M ×															無	皿 IX			
77								L-Δ	L-O	L	L	L	L															無	皿 Vb			
X 78								S	L-Δ	S	M-O	M-O	M-O															無	小鉢 Va			
79								M	L-Δ	M	M	M	M															無	鉢 IIIb			
4 80	L-X							L-Δ	L-O	L	L	L	L															無	高杯 IIIa			
81	L-X							L-Δ	L-O	L	L	L	L															無	高杯 IIIa			
82	L							L-Δ	L-O	L	L	L	L															無	器台 IX			
84	L							L-Δ	L-O	L	L	L	L															無	皿 IX			
85								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IX			
86								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IIIb			
87								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IIIa			
S 88								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IIIa			
89								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IIIa			
90	L-Δ							L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 IIIa			
91								L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 IIIa			
X 92								L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 IIIa			
93	M ×							L	L-O	L	L	L	L															無	器台 Va			
94	M-Δ							L	L-O	L	L	L	L															無	器台 IIIb			
X 95								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 VII			
96								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 VII			
97								L	L-O	L	L	L	L															無	小鉢 IIIc			
98								L	L-O	L	L	L	L															無	小鉢 IX			
99								L	L-O	L	L	L	L															無	小鉢 IX			
100	L-X							L	L-O	L	L	L	L															無	小鉢 IIIa			
101								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IX			
102								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 IX			
103								L	L-O	L	L	L	L															無	皿 VI			
104	L ×							L	L-O	L	L	L	L															無	皿 VII			
105								L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 IIIa			
106								L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 Vb			
107								L	L-O	L	L	L	L															無	鉢 IX			
108								L	L-O	L	L	L	L															無	小鉢 VII			

が認められる。碎屑岩類が認められないものをV a類型、碎屑岩類が認められるものをV b類型とした。

VI類型：構成砂礫種は結晶片岩、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石、輝石である。結晶片岩は白色、灰色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～4mmで、量が僅かである。石英片岩、絹雲母片岩である。火山ガラスは無色透明、黒色透明で、貝殻状である。粒径は0.5mm～1.5mmで、量が多い。石英は淡緑色透明、無色透明で、亜角礫である。粒径は0.2mm～1.5mmで、量の中である。長石は白色、亜角礫である。粒径は2mmで、量が僅かである。黒雲母は金色、板状である。粒径は0.2mm～0.5mmで、量がごく僅かである。角閃石は黒色、柱状の角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm～1mmで、量の中である。結晶面が認められる場合が多い。輝石は黒色、亜角礫である。粒径は0.2mm～0.5mmで、量がごく僅かである。

VII類型：構成砂礫種は花崗岩、閃緑岩、流紋岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、白雲母、角閃石である。チャート、石英、長石、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰色、亜角礫である。粒径は1mm～2mmで、量がごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは石英・長石である。閃緑岩は灰色で、亜角礫である。粒径は0.5mm～1mmで、量が僅かである。流紋岩は黒色で、角礫である。粒径は1mm～1.5mmで、量がごく僅かである。石基は玻璃質で、石英の斑晶が点在する。チャートは灰色、黒色、赤色、赤褐色で、亜円礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量が僅か～多いである。火山ガラスは灰色、貝殻状である。粒径は0.5mm～1mmで、量が僅かである。石英は無色透明で、角礫、亜角礫である。粒径は0.2mm～3mmで、量の中～多いである。長石は白色、角礫である。粒径は0.2mm～2mmで、量が僅か～多いである。黒雲母は黒色、金色で、板状である。粒径は0.2mm～2mmで、量がごく僅か～僅かである。白雲母は無色透明、板状である。粒径は1mm以下で、量の中である。1試料のみに認められる。角閃石は黒色で亜角礫である。粒径は0.2mm～1mmで、量が僅か～中である。

VIII類型：構成砂礫種は花崗岩、流紋岩、砂岩、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は灰白色、角礫である。粒径は0.5mm～2mmで、量がごく僅か～僅かである。流紋岩は灰白色、赤褐色で、角礫、亜角礫である。粒径は0.5mm～3mmで、量が僅か～中である。石基は玻璃質である。石英は無色透明で、角礫である。粒径は0.5mm～1.5mmで、量の中～多いである。長石は白色、角礫である。粒径は0.2mm～1.5mmで、量はごく僅か～僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径は0.2mm～0.5mmで、量がごく僅か～僅かである。角閃石には結晶面が認められる場合がある。

IX類型：I類型からVIII類型のいずれにも属さない試料をみつめたものである。

5. 砂礫の採取地

土器出土地により近い距離で、土器胎土中の砂礫と同じ砂礫構成の砂礫が得られる場所を砂礫の採取地とする。

土器出土地点の久宝寺付近の砂礫構成は、花崗岩起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩類が

ごく僅かに含まれる。碎屑岩は主としてチャートである。チャートの量は、八尾市中田、萱振、山賀付近では少なく、試料によっては認められない場合がある。同市八尾南、大阪市長原付近になれば含まれる量が比較的多くなり、堺市付近になれば、更に多くなる。角閃石は細粒でごく僅か～僅かに含まれる場合、認められない場合がある。粒径は細粒である。

当遺跡付近の砂礫構成と同じ砂礫構成の土器は、III類型に属するものである。IV a 類型の土器はチャートが多く、砂岩、泥岩等が含まれ、花崗岩起源の砂礫が比較的少ないことから、堺市付近が、IV b 類型の土器はチャートが比較的多く含まれることから、八尾南から長原にかけての地域が砂礫の採取地と推定される。

II 類型の土器は、他形の角閃石が多く、石英が少なく、碎屑岩類が含まれないことから、塩基性の深成岩分布域の砂礫であると推定される。生駒山地には生駒山を中心に斑礫岩が広く分布する。構成砂礫粒には鋭い角があり、粒度が一定しないことから、岩石を粉碎した粒である可能性がある。石英が細粒で少ないことなどを考慮すれば、斑礫岩を粉碎した砂礫を利用したと推定される。斑礫岩中には石英が含まれることがないため、裸眼で石英が認められる砂礫構成は、花崗岩等の石英が混入する条件にあった砂礫と推定される。前者の砂礫構成を示す土器がII a 類型に属する土器で、後者がII b 類型に属する土器である。

V 類型に属する土器には、石英と角閃石に僅かではあるが自形が認められ、閃緑岩に柱状自形の角閃石が含まれる場合がある。このような砂礫構成の砂礫は岡山市足守川の砂礫に酷似する。足守川の中流域では碎屑岩類が認められないが、下流の上東遺跡出土の土器中には碎屑岩類が認められるものがある。V 類型の土器は足守川の下流域の砂礫を採取して制作された土器であると推定される。

VI 類型に属する土器には、結晶片岩、自形の角閃石、輝石が認められることから、結晶片岩、安山岩等が広く分布する地域である。このような条件を満たす地域としては、山陰地方の鳥取県東部や島根県のいずれかが推定される。距離的には鳥取県に近い。

VII 類型に属する土器は花崗岩類起源と推定される砂礫を主とし、流紋岩類が比較的多く含まれる。このような砂礫構成の砂礫は、備前市から加古川市にかけての播磨から備前東部付近の砂礫構成に類似する。

VII 類型・IX 類型に属する砂礫構成の砂礫は明らかに土器出土付近の砂礫構成と異なることから、当付近以外で採取された砂礫であると推定される。

6. おわりに

土器胎土中の砂礫の採取地と制作地が同じであるとするならば、I 類型の土器は紀ノ川流域和歌山市付近から、II 類型の土器は生駒山地の西麓から、IV a 類型の土器は堺市付近から、IV b 類型の土器は長原から八尾南にかけての付近から、V 類型の土器は吉備、足守川の下流域から、VI 類型の土器は鳥取県東部付近から、VII 類型の土器は播磨西部から備前東部にかけての付近から運

試料 番号	岩							石							物							塊上塊	器種	類型
	花崗岩 30倍 肉眼	閃綠岩 30倍 肉眼	斑輝岩 30倍 肉眼	流紋岩 30倍 肉眼	チャート 30倍 肉眼	結晶片岩 30倍 肉眼	火山ガラス 30倍 肉眼	石 30倍 肉眼	石英 30倍 肉眼	長石 30倍 肉眼	石 30倍 肉眼	雲母 30倍 肉眼	角閃石 30倍 肉眼	輝石 30倍 肉眼	石 30倍 肉眼	塊上塊	器種	類型						
143	1-1-1-1-1				M ×				M ×	M ×	S ×							無	莖	IIIb				
144	1-1-1-1-1			M ×						S ×								無	小丸	IIIb				
145	0 1									M-△ β								無	莖	Va				
146										M ×								無	莖	IIIa				
147				M ×						M ×								無	莖	IX				
148	1-1-1-1-1									M ×								無	莖	IIIa				
149	1-1-1-1-1									M ×								無	莖	IX				
150	M ×									M ×								無	高杯	Va				
151										M ×								無	高杯	IX				
152										M ×								無	高杯	IX				
153	1-1-1-1-1									M ×								無	高杯	IX				
154	M ×									M ×								無	器台	IX				
155										M ×								無	器台	不能				
156										M ×								無	小丸	IIIa				
157	M ×									M ×								無	小丸	IX				
158	1 ×									M ×								無	小丸	IIIa				
159	1-1-1-1-1									M ×								無	小丸	VII				
160										M ×								無	小丸	IIIa				
161										M ×								無	小丸	IIIb				
162										M ×								無	小丸	Va				
163	M ×									M ×								無	莖	VII				
164										M ×								無	莖	IIIa				
165										M ×								無	莖	I				
166	1-1-1-1-1									M ×								無	莖	IIIb				
167	1-1-1-1-1									M ×								無	莖	IX				
168										M ×								無	莖	IX				
169										M ×								無	莖	IIIa				
170	1-1-1-1-1									M ×								無	小丸	不能				
171	1-1-1-1-1									M ×								無	鉢	IX				
188										M ×								無	鉢	IIIb				
188										M ×								無	莖	IIb				

ばれたと言える。また、Ⅶ類型、Ⅸ類型の土器も砂礫の採取地は推定しがたいが、他域から運ばれてきたものである。

類型区分不能な8点を除いた142試料中、実に82試料の土器、約58%の土器が当遺跡に搬入されていることになる。このような搬入量の多い例としては、八尾市中田一丁目の土壙出土土器、同市萱振遺跡の井戸跡出土の土器があげられる。

器種と類型との関係を見れば、甕と壺には多くの類型が含まれるのに比べ、鉢、高杯、器台等には類型が限定される。また、類型と器種との関係を見れば、Ⅲ類型、Ⅴ類型では全ての器種が含まれている。また、Ⅱ類型では、主として甕に限定される。

Ⅴ類型は22試料含まれ、約15%を占める。在地で全ての器種を作ることは理解しえるが、一地域から搬入した土器が割五分以上にも達し、全ての器種が認められることは、今後、当付近とのつながりを考える必要がある。(1985年6月)

第3表 類型と器種

類型	器種	甕	壺	鉢	高杯	器台	小丸	合計
I			1					1
Ⅱ a		8	1					9
Ⅱ b		2						2
Ⅲ a		1 1	5	3	3	1	5	2 8
Ⅲ b		9	3	7	1	3	6	2 9
Ⅲ c		2					1	3
Ⅳ a		1						1
Ⅳ b		3						3
Ⅴ a		1	3	1	2	2	5	1 4
Ⅴ b		5		1	1		1	8
Ⅵ								1
Ⅶ		3					2	8
Ⅷ		2	1					3
Ⅸ		1 1	4	8	2	3	4	3 2
不能				1	3	2	2	8
合計		5 8	2 2	2 1	1 2	1 1	2 6	1 5 0

第4節 久宝寺遺跡南地区第1調査区出土土器の偏光顕微鏡による砂礫観察

八尾市立刑部小学校教諭 奥田 尚

土器を薄片化した試料50点の観察を行った。薄片化した試料の器種と時期については表に示す通りである。

薄片の大きさは24mm×32mmである。この面積で、土器全体の胎土中の砂礫構成を代表できるかは検討を得ていない。試料は薄片化しているため、岩石を観察する場合と同じように偏光顕微鏡を用いて観察した。観察できた岩石片は、花崗岩、斑禰岩、砂岩、泥岩、チャート、片岩、火山ガラス等で、鉱物片は、石英、カリ長石、斜長石、黒雲母、角閃石、輝石、橄欖石等である。石英については、片麻岩や圧砕岩等によく見られる波動消光についても注意した。カリ長石ではパーサイト構造や累帯構造に注意した。試料の一部分をオープンニコル時とクロスニコル時の2枚に分けて写真を撮った。2つの写真を比べれば、だいたいの岩石種や鉱物種の予測はつけられると思われる。しかし、偏光顕微鏡による観察は、オープンニコル時の多色性や、クロスニコル時の消光角や干渉色などをもとに鉱物を区別していくため、写真による絵合わせでは判断できない。

試料をオープンニコル・クロスニコル下で撮影した写真と、そこに見られる岩石片・鉱物片のスケッチ及び簡単な説明を図版に示す。

表に示すように、比較的大きな砂礫粒の種類を量的にみれば、石英を主とする場合、斜長石や角閃石を主とする場合に区分ができる。角閃石が比較的多く含まれる試料には斜長石が多く含まれ、斑禰岩等が含まれる場合が多い。石英には波動消光を示すものが見られる試料もある。波動消光を示す石英は片麻岩や圧砕岩中の石英によく見られる。

観察に使用した試料は、24mm×32mmである。この全体を観察した場合と写真に撮影した約1.8mm×2.5mmの範囲内を比べた場合、写真内で認められない岩石が多い。つまり、写真に撮影した部分で、薄片全体を表していないと言える。推測となるが、使用した薄片が土器中の砂礫構成を代表しているかについては疑わざるを得ない。

観察試料が薄片であるため、短冊状を示す角閃石があっても、自形か他形の判断はできない。石英や長石、輝石についても同じである。また、火山ガラスに於いても形状や色が観察できない。

以上のような難点が多くあげられるが、試料の砂礫構成から次のようなことが推定される。

①角閃石が比較的多く含まれる試料には石英が少ないことから、塩基性の深成岩の分布地域の砂礫である。

②石英が比較的多く含まれる試料には角閃石や輝石等が少ないことから、酸性の岩石分布地域の砂礫が推定される。また、碎屑岩類が比較的多く含まれるものは、新期層の分布域から流出した砂礫であると考えられることから、酸性の岩石が分布し、かつ、新期層が分布する場所が考えられる。

表1 資料の器種と時期、砂礫種（図版に見られる比較的粗粒砂）

資料 番号	遺物 番号	器種	使用時期	資料 部分	岩					片					その他				
					花崗岩	斑 綱 岩	砂 岩	泥 岩	チ ャ ー ト	火 山 カ ラ ス	片 岩	石 英	カ 長 石	斜 長 石		黒 雲 母	角 閃 石	輝 石	橄 欖 石
1	Y-	甕	IV様式期	胴部	+				+			○						+	
2	168- 6	甕	V様式期	胴部			+		+			○	+	+					
3	169- 15	壺			+				+			○		+					
4	162-.69	高杯	IV様式期	口縁		+	+					+		○		△			
5	167- 26	甕	V様式期						+			○	+		+	+	+		焼土塊
6	154- 86	台付鉢	IV様式期	口縁	+							○					+		
7	162- 62	台付鉢	IV様式期	口縁					+	○		○		△					
8	157-134	甕	IV様式期	胴部								+		○	+	○			
9	163- 88	甕	IV様式期	口縁	+				△			○							焼土塊
10	163- 76	甕	IV様式期	口縁	△		+	+	+			○	+	+					
11	157-137	高杯	IV様式期	口縁	+							○		+					
12	158- 12	壺	IV様式期	胴部		+						+		△		○			
13	172- 23	壺	V様式期	胴部								+		△	+	○			
14	167- 16	壺	V様式期	口縁	+						+	○	+	△				+	
15	158- 6	大型鉢	IV様式期	口縁	△							○							
16	165- 65	甕	IV様式期	口縁										○		△			
17	163- 27	無頸壺	IV様式期	口縁	+							○	+	+		+			
18	160- 57	壺		胴部		+								+		○			
19	160- 48	壺		胴部					+			○	△						
20	167- 27	甕				△						△		△		○	+		
21	158- 11	壺		胴部					+			○							
22	163- 10	壺	IV様式期	胴部								○	△						
23	160- 45	甕		胴部								+		△		○	+		
24	158- 4	甕	IV様式期	胴部				+	+			○							
25	156-129	甕	IV様式期									○	+	△	+				
26	167- 29	甕	IV~V様式期		+				△			○	+						
27	157-147	高杯		脚裾部	+				+			○	+			+			
28	169- 3	壺	IV様式期	胴部					+			○	+	+					
29	Y-.243	甕	V様式期				+		+			○							
30	161- 23	壺	V様式期	口縁								○							
31	159- 22	鉢	IV様式期	口縁			+		+			○		+					
32	151- 15		縄文後期		△		+		+		△	△							
33	151- 14		縄文後期									+		○		○			
34	161- 21	壺	V様式期	口縁	△				+			○		+					
35	156-122	高杯		身部	+							○	+						
36	152- 29	甕	IV様式期									○		+		△			
37	Y- 126	甕	IV様式期			△						△				○			
38	157-135	甕	IV様式期						+			○	+	+					
39	159- 18	甕	IV様式期						+			○		+		+			
40	Y- 95	甕	IV様式期									○							
41	171- 41	甕	V様式期									○	+						
42	153- 43	小型椀										+		+		○			
43	164- 31	壺		口縁	+							+		+		○			
44	156-107	高杯	IV様式期	口縁	+	+						△		○		+			
45	152- 30	甕	IV様式期	口縁		+							+	+		○			
46	168- 11	甕	IV様式期	胴部	+				+			○	△	+					
47	166- 5	壺	IV様式期		+				+	○		○							
48	171- 43	大型鉢	IV様式期					+				○	+	+					
49	171- 39	甕	V様式期		+							○		+	+				
50	170- 31	高杯	V様式期						△			○							

○ 比較的に多い。 △ 比較的に僅か。 + 含まれている。

図版凡例

〔左ページ〕

試料番号

説 明

スケッチ図

〔右ページ〕

オープンニコル写真

クロスニコル写真

図版の記号について

スケッチ略図の左下にある太い線は、1 mmの長さを示す。

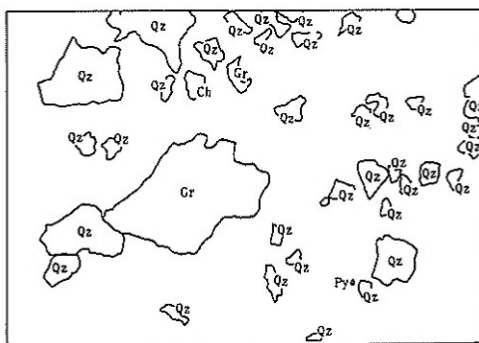
図内に付けてある記号は次のようである。

Gr . . . 花崗岩	Ga . . . 斑糲岩	Ss . . . 砂岩	Ms . . . 泥岩
Ch . . . チャート	Sh . . . 片岩	Qz . . . 石英	Ka . . . カリ長石
Pl . . . 斜長石	Bi . . . 黒雲母	Am . . . 角閃石	Py . . . 輝石
Ol . . . 橄欖石			

(花崗岩としたものには、便宜上、石英と長石がかみ合った岩片も含めた。)

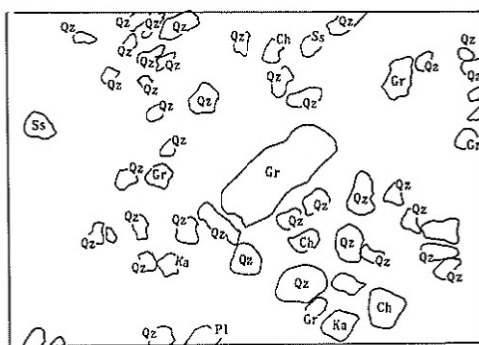
試料番号 1 (B-1, P-1)

石英が多く、チャート、石英と長石がかみ合った岩片、輝石である。



試料番号 2 (B-1, P-2)

石英が多く、砂岩、チャート、斜長石、カリ長石、石英と長石がかみ合った岩片である。石英には波動消光がみられるものがある。



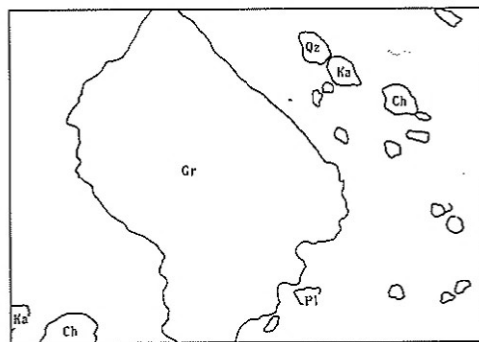
試料番号 3 A (A-1, P-3 A)

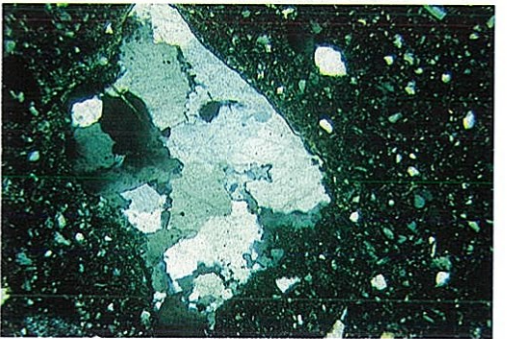
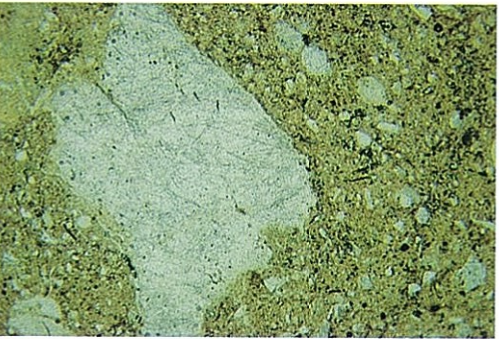
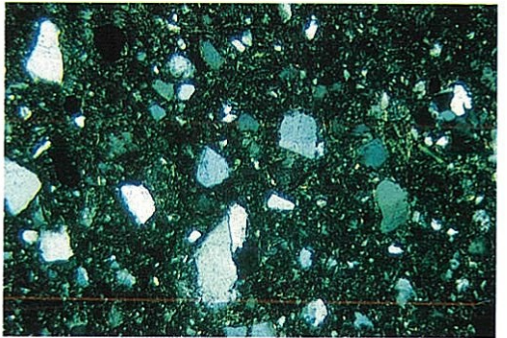
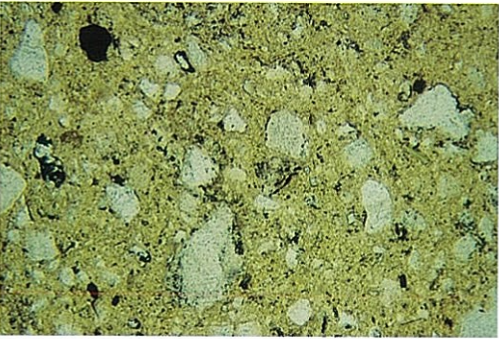
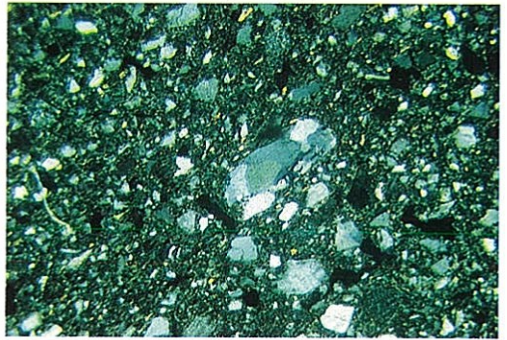
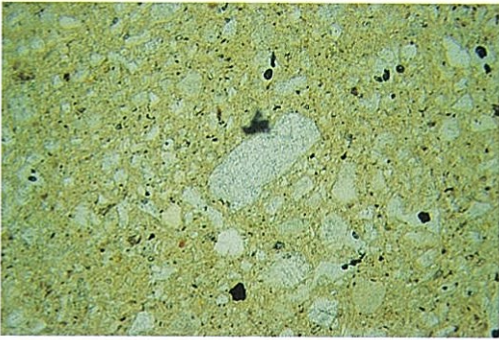
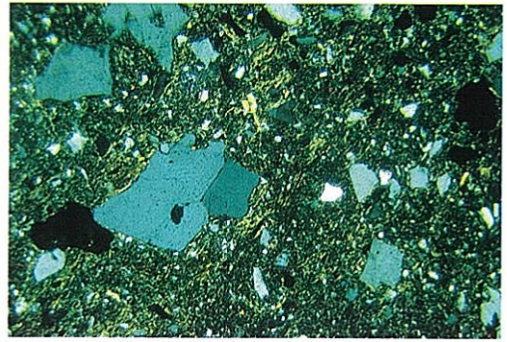
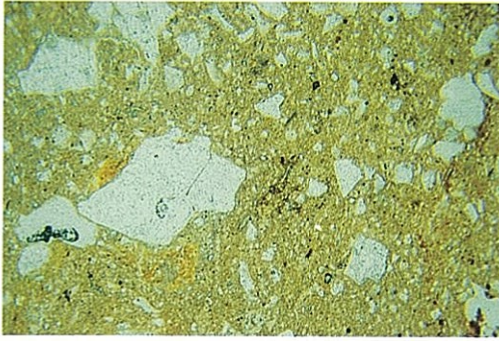
石英を主とし、斜長石、チャート、石英と長石がかみ合った岩片である。石英には波動消光があるものがある。



試料番号 3 B (B-1, P-3 B)

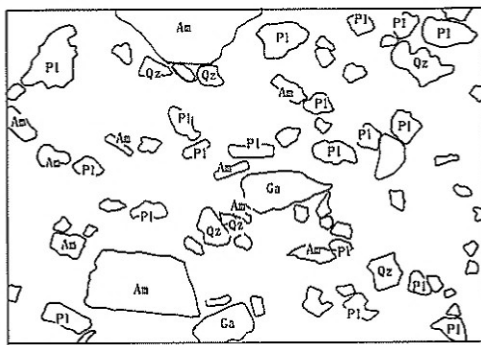
花崗岩の角礫がみられる。他に石英、カリ長石、斜長石、チャートがある。





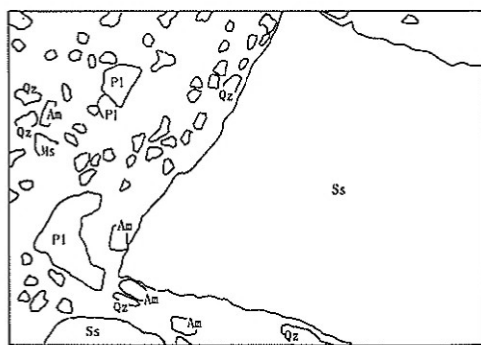
試料番号 4 A (A-1, P-4 A)

斜長石が多く、角閃石、石英、斑縞岩である。斜長石にはアルバイト双晶を示すものがあり、石英には波動消光を示すものがある。



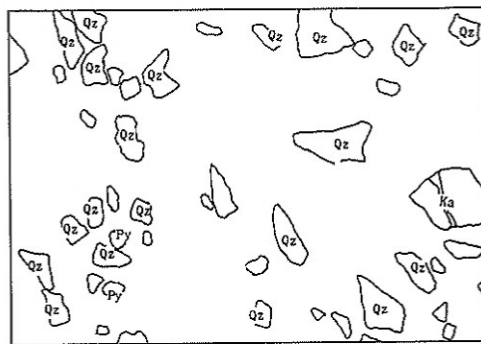
試料番号 4 B (B-1, P-4 B)

角礫の砂岩、円礫の砂岩、泥岩、石英、斜長石、角閃石である。斜長石にはアルバイト双晶が見られる。



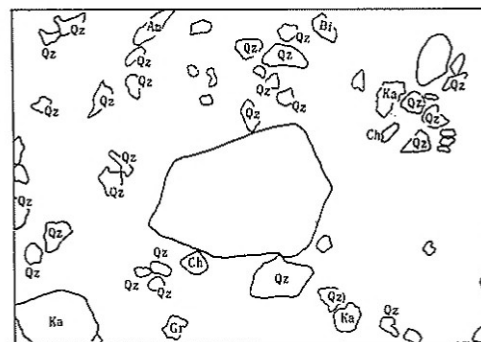
試料番号 5 A (A-1, P-5 A)

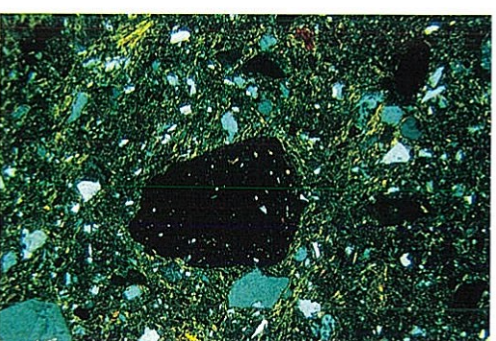
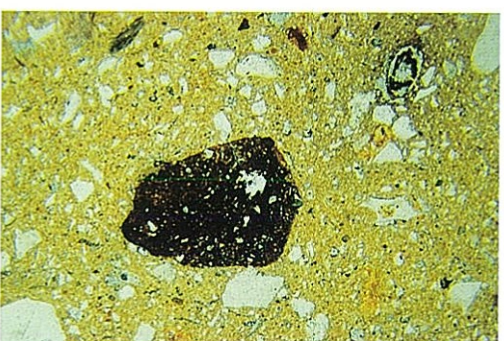
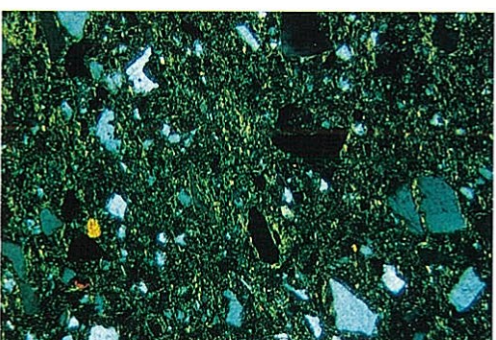
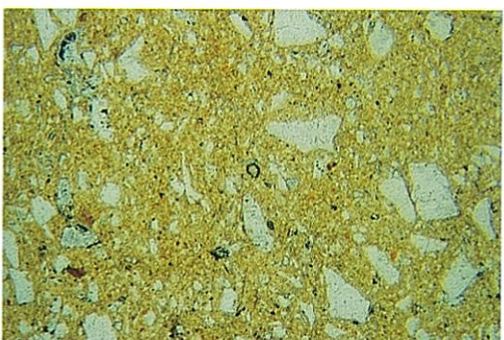
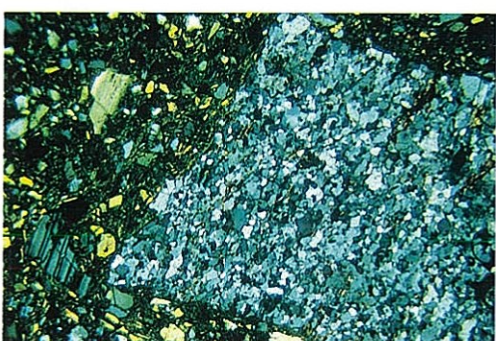
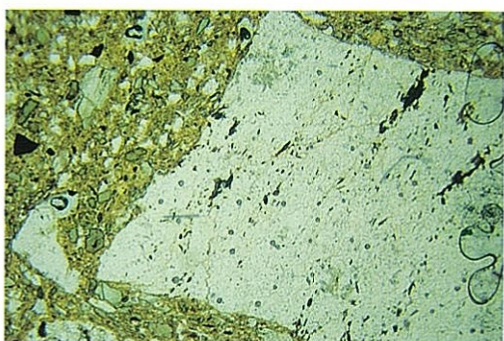
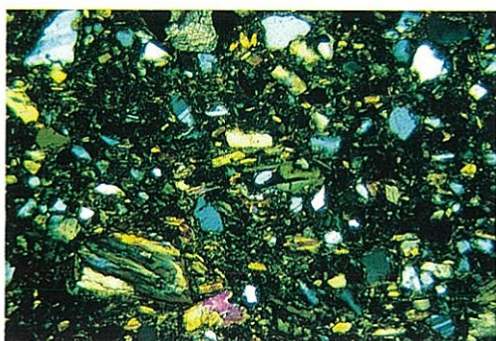
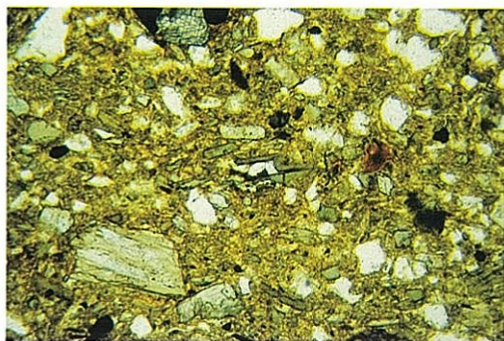
石英を主とし、カリ長石、輝石である。



試料番号 5 B (B-1, P-5 B)

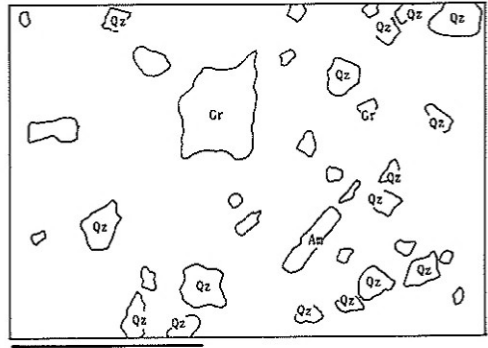
石英が多く、チャート、カリ長石、角閃石、黒雲母である。黒色の粒は焼土塊である。





試料番号 6 (A-1, P-6)

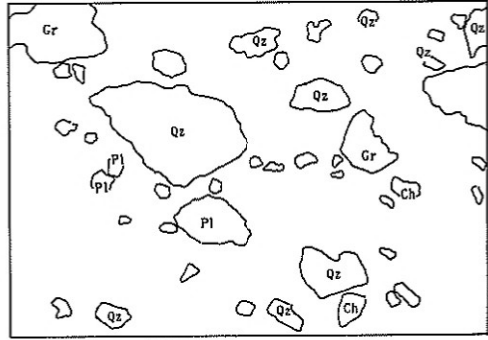
石英を主とし、角閃石、石英と長石がかみ合った岩片である。



試料番号 7 (A-1, P-7)

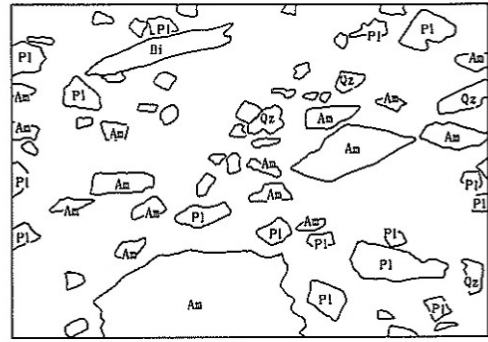
オープンニコル下では貝殻状断面をなす火山ガラスが多く見られる。

石英が多く、花崗岩片、斜長石、チャートである。石英は僅かであるが波動消光を示す。斜長石はアルバイト双晶をなすものがある。



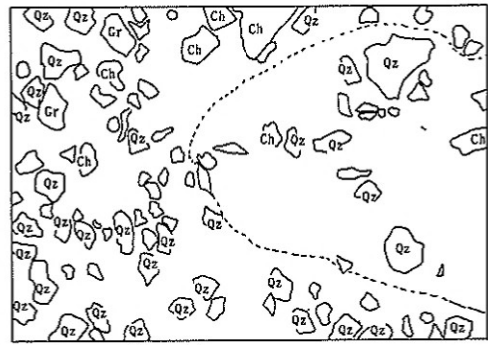
試料番号 8 (A-1, P-8)

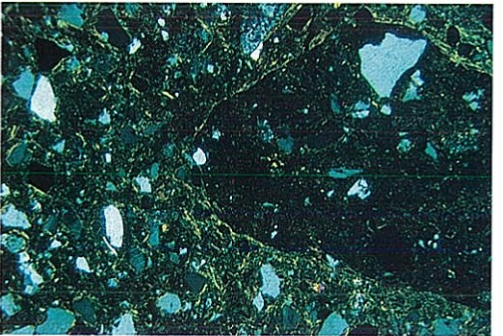
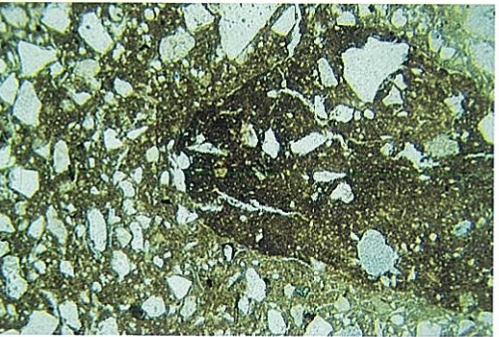
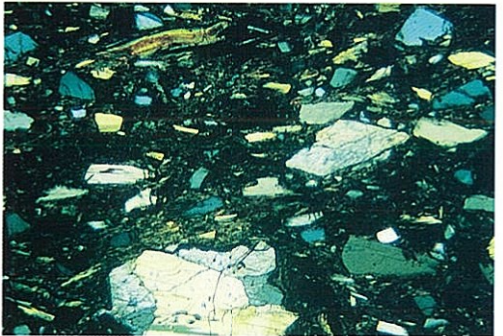
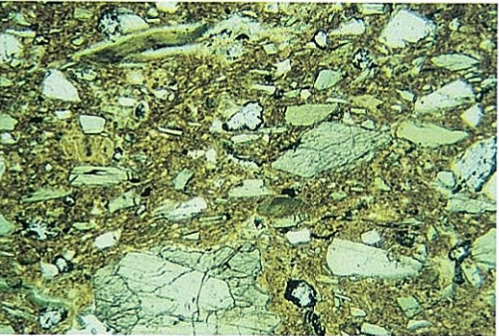
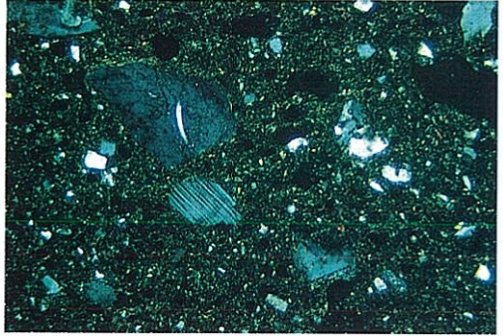
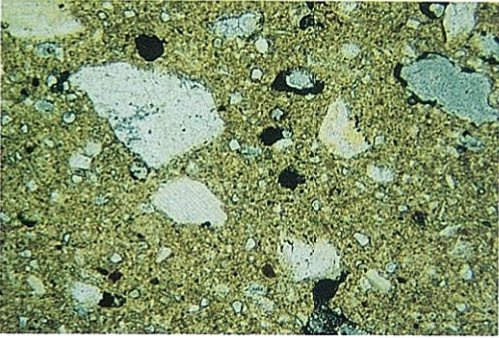
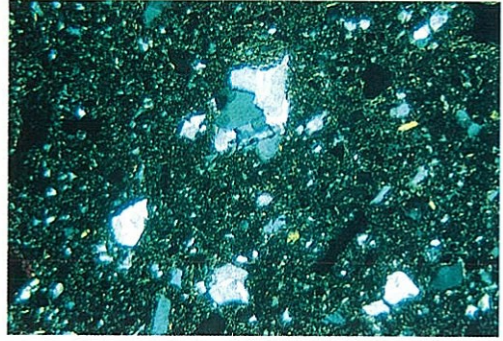
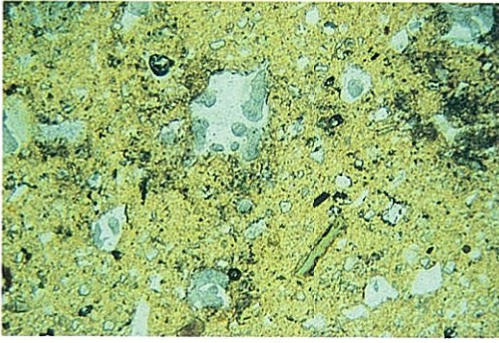
斜長石と角閃石が多く、石英、黒雲母は僅かである。石英には波動消光を示すものがある。斜長石にはアルバイト双晶をなすものが多い。角閃石は角が鋭い角礫が粗粒から細粒のものまである。



試料番号 9 (B-1, P-9)

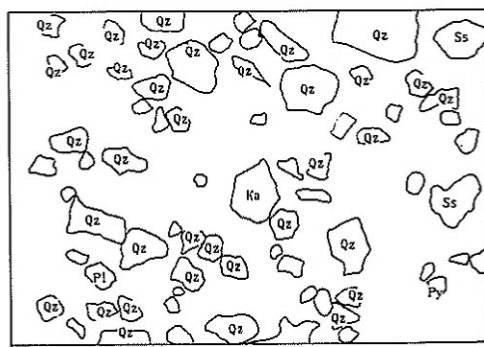
石英が非常に多く、石英・長石からなる岩片、チャートである。右半分の色は黒い部分は焼土塊であり、焼土塊中にも石英が多く、チャートが含まれる。





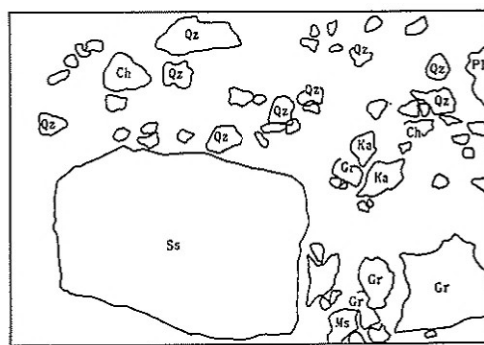
試料番号10A (A-1, P-10A)

石英を主とし、カリ長石、斜長石、輝石、砂岩である。



試料番号10B (B-1, P-10B)

亜角礫の砂岩、石英・長石がかみ合った岩片、チャート、泥岩、石英、カリ長石、斜長石である。酸性の岩片・鉱物片が多い。



試料番号11 (A-2, P-11)

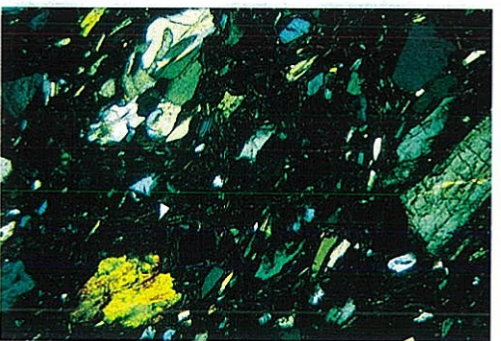
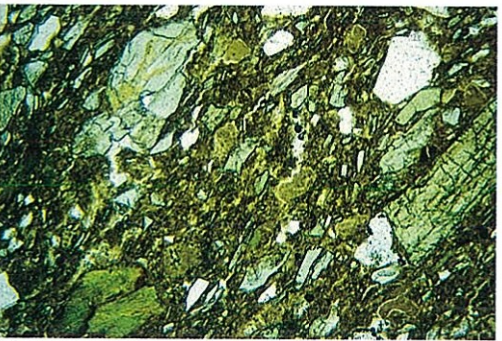
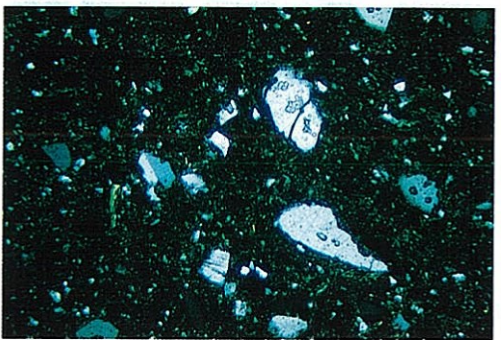
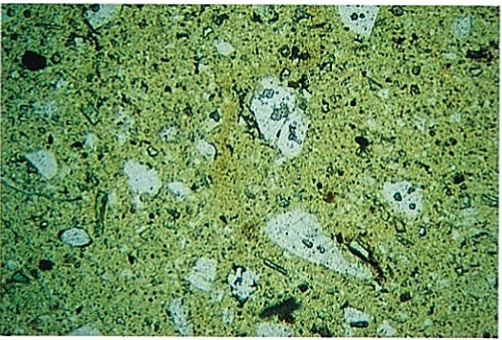
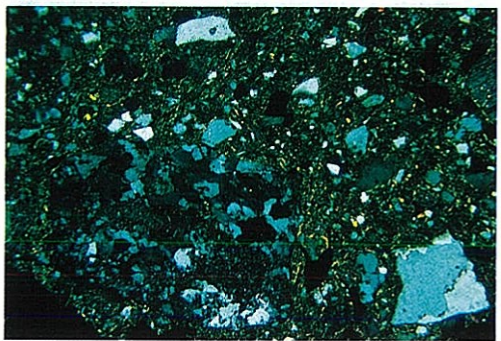
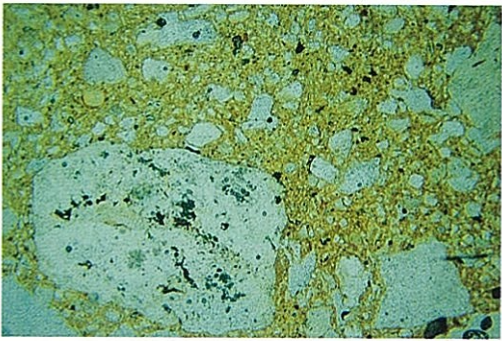
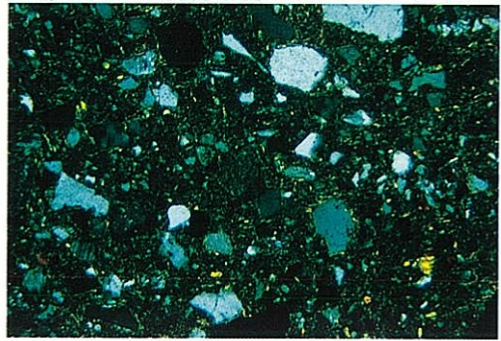
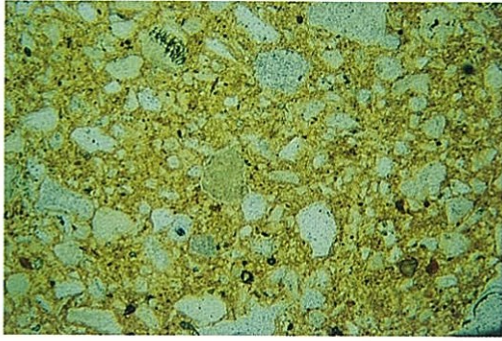
主として石英からなり、斜長石、石英と長石がかみ合った岩片である。斜長石にはアルバイト双晶がある。



試料番号12 (A-2, P-12)

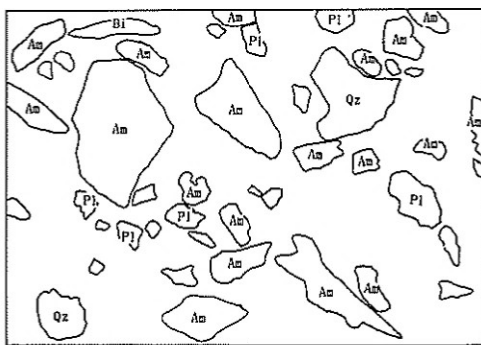
角閃石が多く、斑糲岩、斜長石、石英である。石英には波動消光が見られる。斜長石はアルバイト双晶がある。





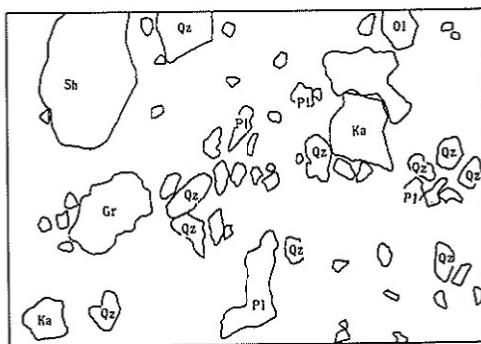
試料番号13 (A-2, P-13)

角閃石が多く、斜長石、石英、黒雲母である。
角閃石には鋭い角がある。斜長石にはアルバイト
双晶が見られる。



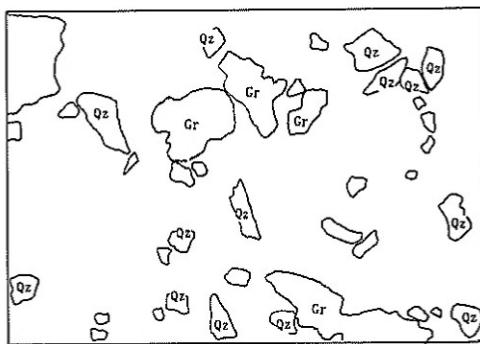
試料番号14 (A-2, P-14)

花崗岩、岩片、石英、カリ長石、斜長石、橄欖
石である。石英には僅かであるが波動消光がある。
橄欖石は干渉色が高く、赤紫色をなす。



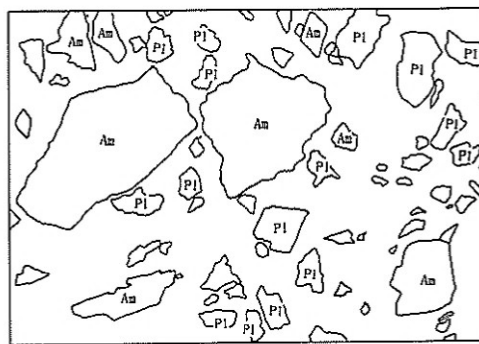
試料番号15 (A-2, P-15)

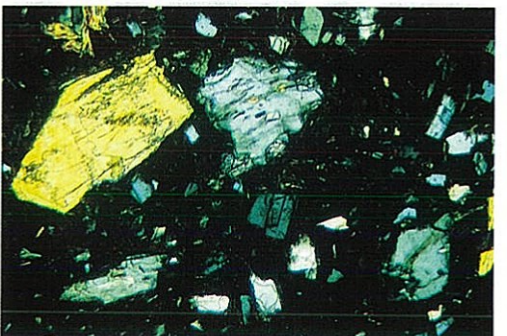
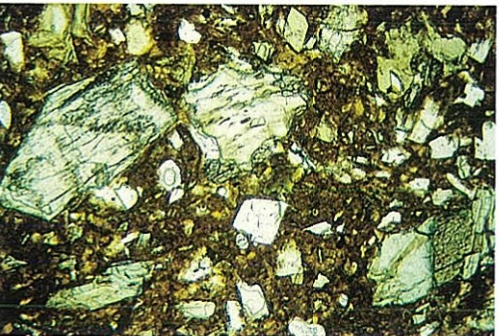
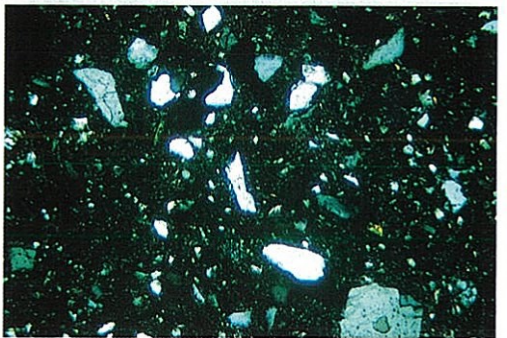
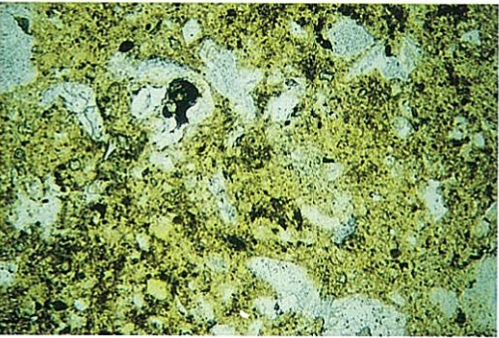
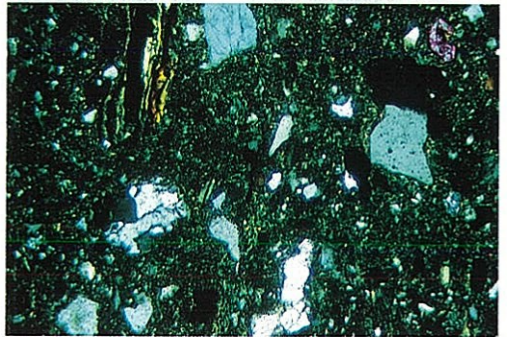
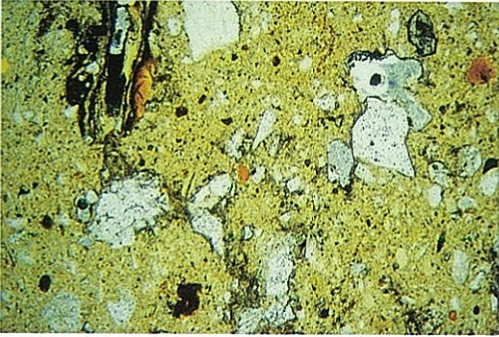
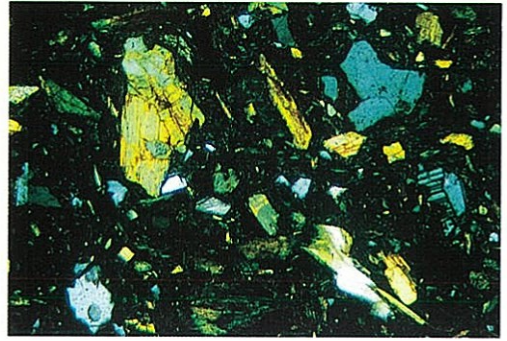
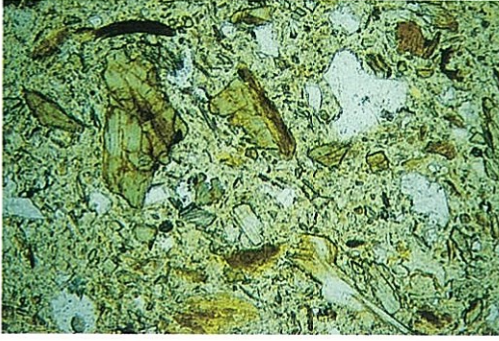
石英が多く、石英と長石がかみ合った岩片であ
る。



試料番号16 (A-2, P-16)

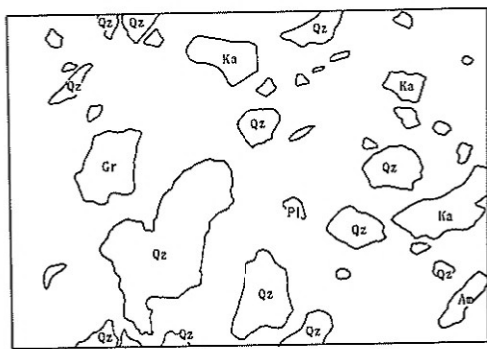
角閃石、斜長石である。斜長石にはアルバイト
双晶を示すものがある。





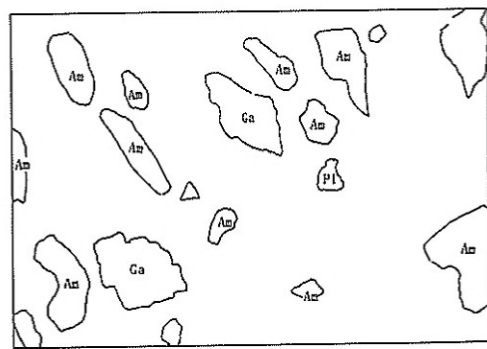
試料番号17 (A-2, P-17)

主として石英からなり、石英・長石がかみ合った岩片、カリ長石、斜長石、角閃石である。石英はほとんど全てが波動消光を示す。



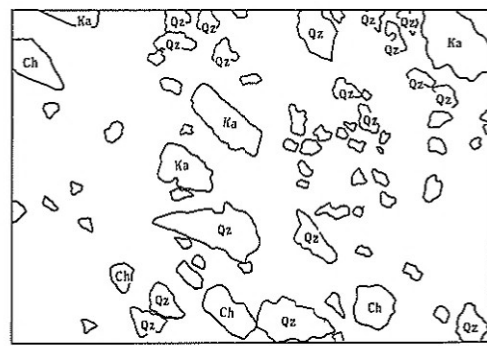
試料番号18 (A-2, P-18)

角閃石が多く、斑縞岩、斜長石である。斑縞岩は角閃石、輝石、斜長石がかみ合っている。斜長石にはアルバイト双晶が見られる。



試料番号19 (A-2, P-19)

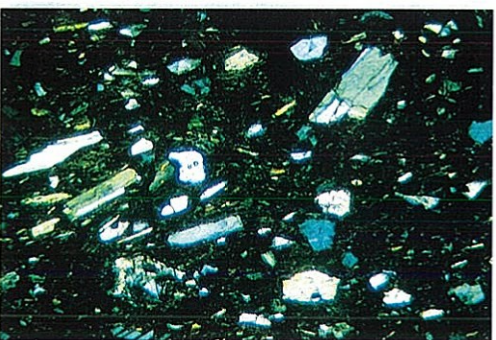
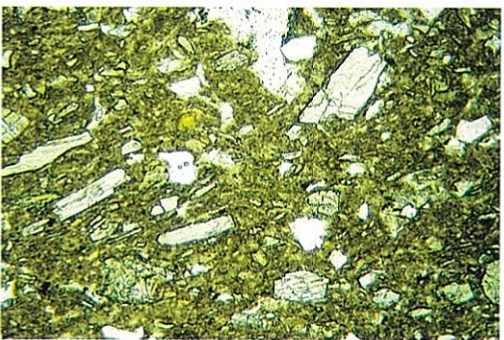
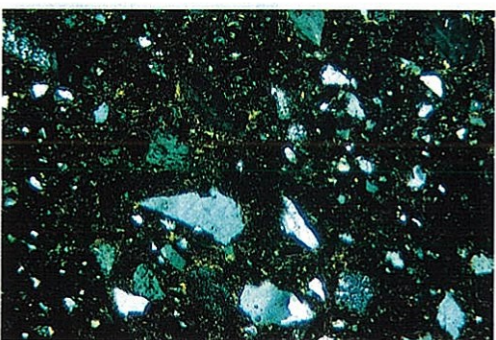
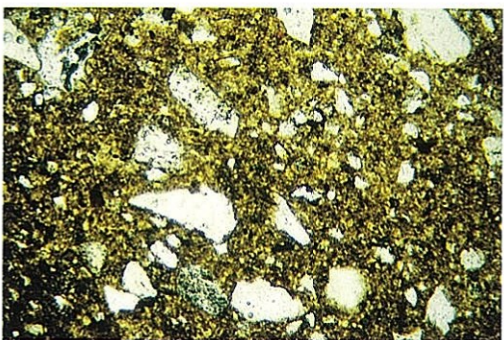
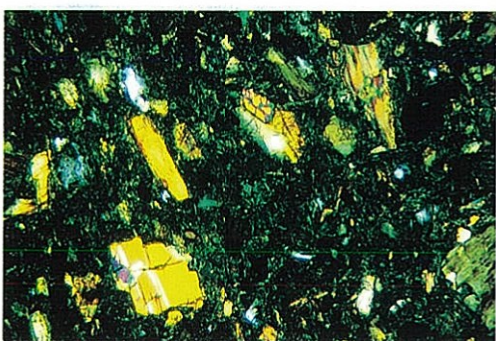
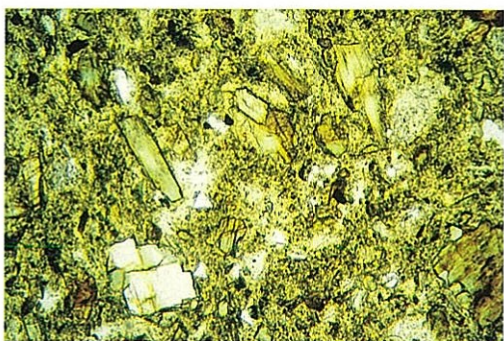
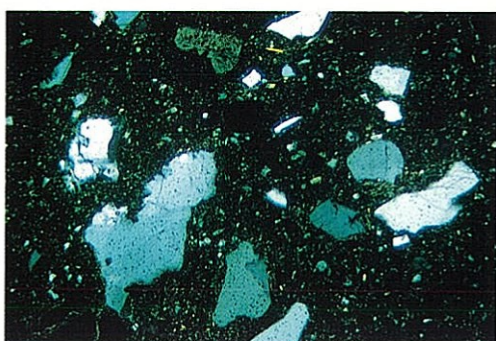
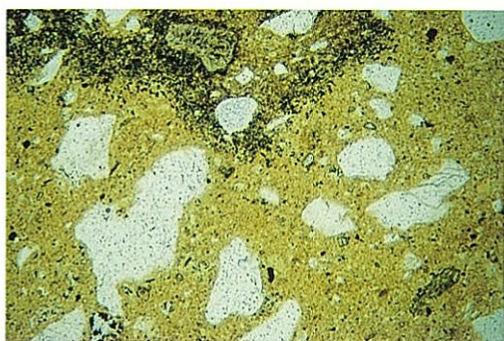
石英が多く、チャート、カリ長石である。石英は円磨度が低いのに比べ、チャートは比較的円磨度が高い。



試料番号20A (A-2, P-20A)

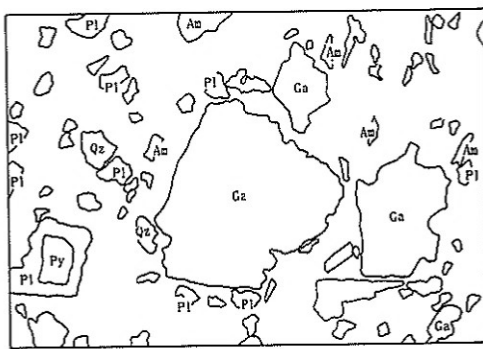
角閃石が多く、石英、斜長石である。角閃石には鋭い角がある。石英には波動消光するものがある。





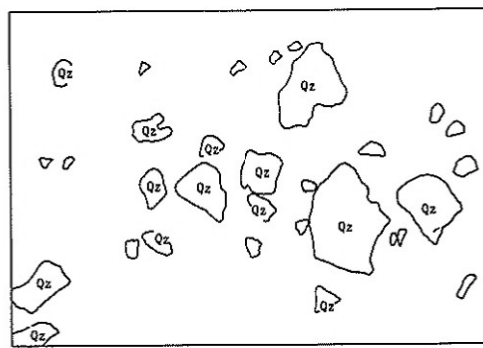
試料番号20B (B-3, P-20B)

斑孺岩、斜長石、角閃石、石英である。全て角礫であり、岩片は粗粒から細粒のものまである。斜長石の中心部が輝石からなるものがある。石英はごく僅かで、塩基性の岩片、鉱物片が多い。



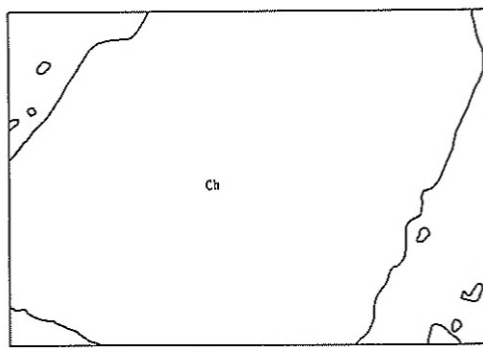
試料番号21A (A-2, P-21A)

石英が多く見られる。



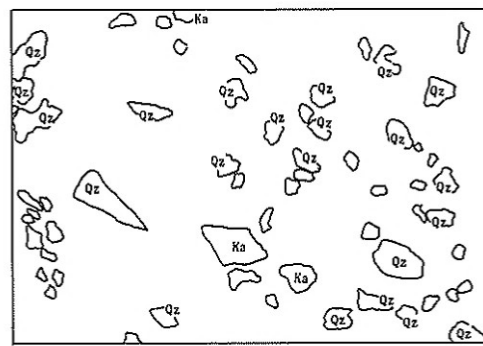
試料番号21B (B-3, P-21B)

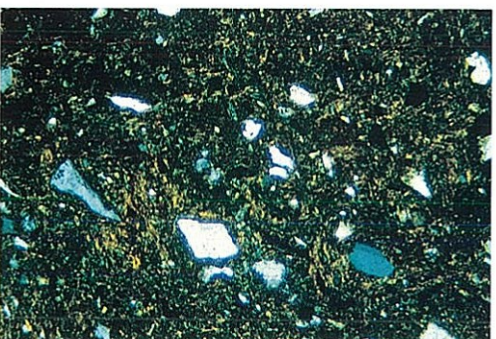
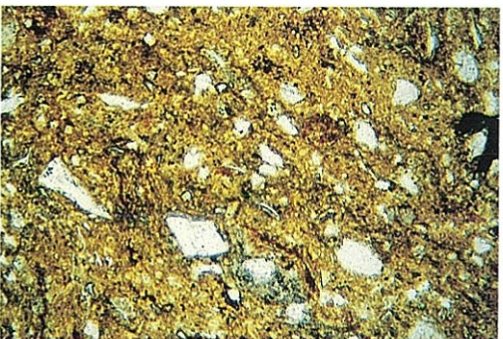
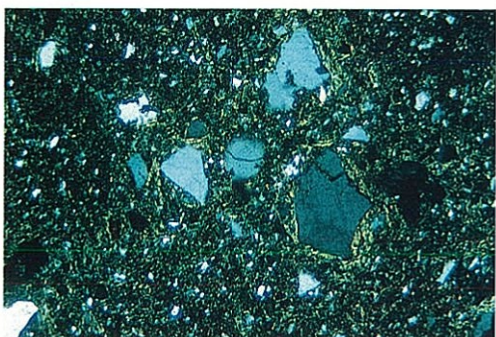
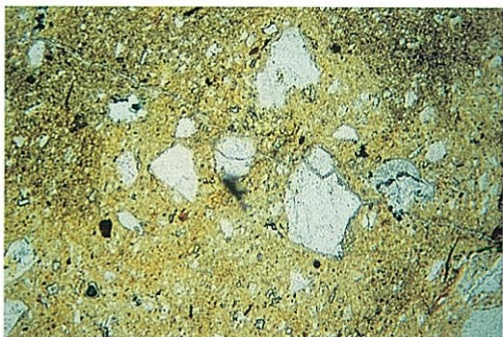
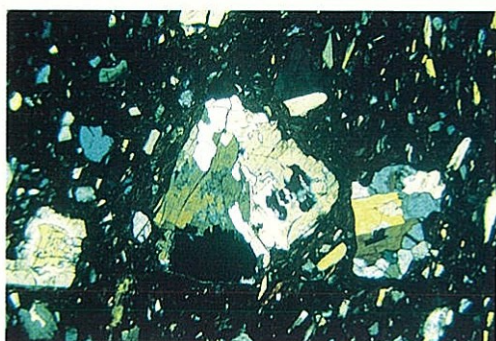
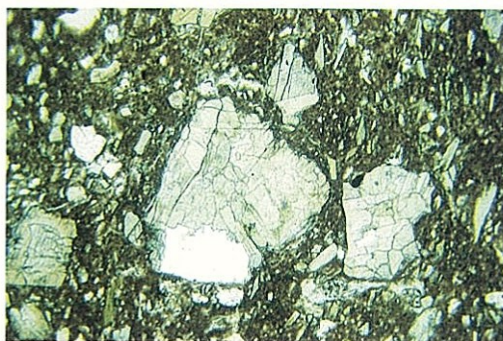
チャートの岩片である。



試料番号22 (A-2, P-22)

石英が多く、カリ長石である。石英には波動消光するものがある。





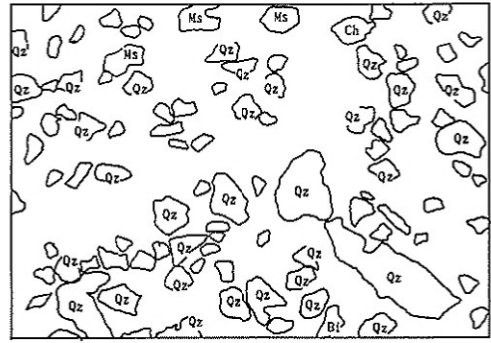
試料番号23 (A-2, P-23)

角閃石が多く、斜長石、石英、輝石である。角閃石には鋭い角がある。斜長石にはアルバイト双晶が見られる。石英は波動消光するものがある。



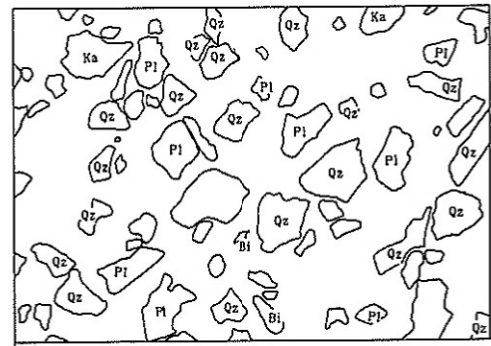
試料番号24 (A-2, P-24)

主として石英からなり、泥岩、チャート、黒雲母が僅かである。石英には波動消光を示すものがある。



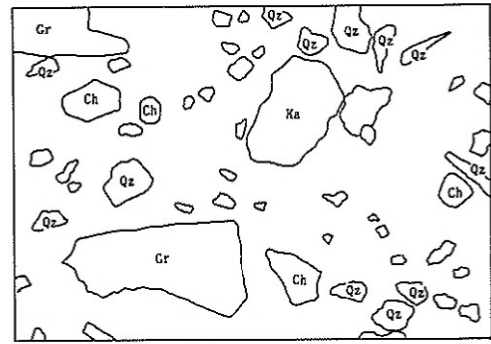
試料番号25 (A-2, P-25)

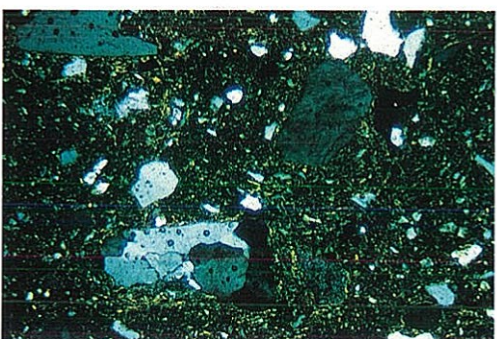
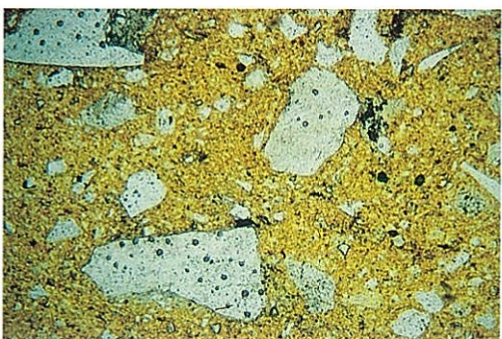
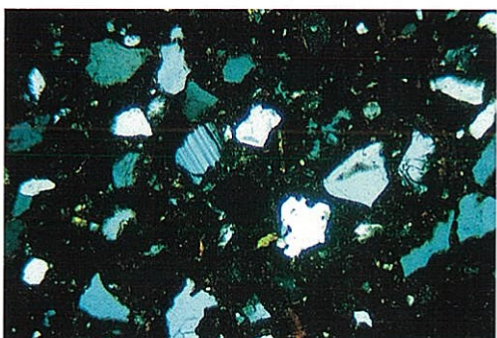
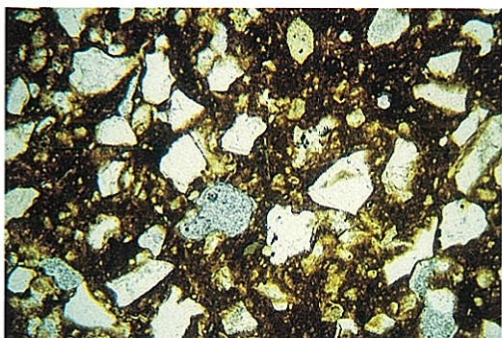
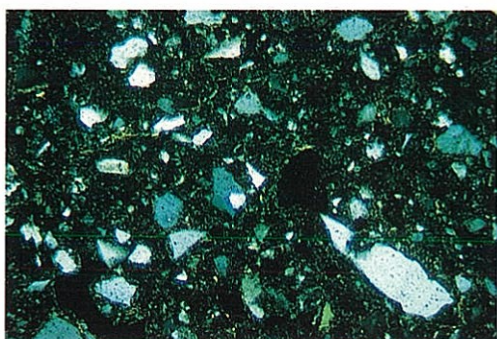
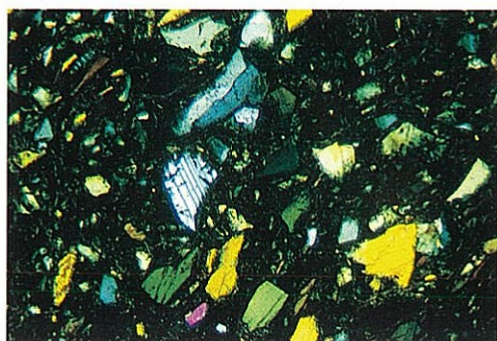
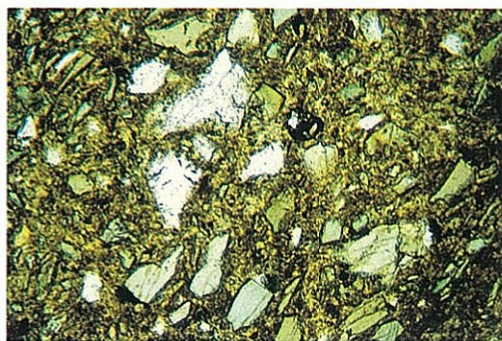
石英を主とし、カリ長石、斜長石、黒雲母である。



試料番号26 (A-2, P-26)

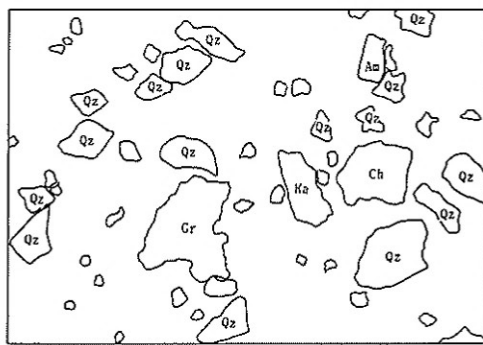
石英が多く、花崗岩、チャート、カリ長石である。花崗岩は、石英、カリ長石、黒雲母がかみ合っている。





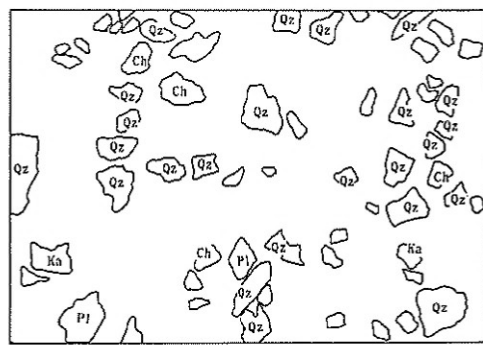
試料番号27 (A-3, P-27)

石英が多く、チャート、角閃石、カリ長石、石英と長石がかみ合った岩片である。



試料番号28 (A-3, P-28)

石英を主とし、カリ長石、斜長石、チャートである。



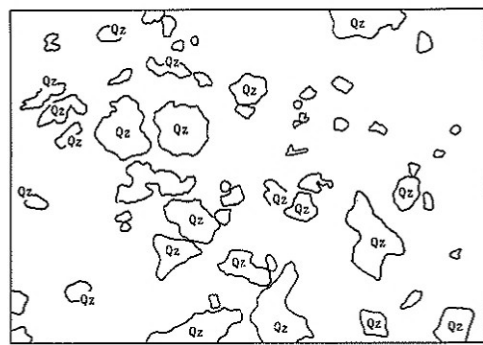
試料番号29 (A-3, P-29)

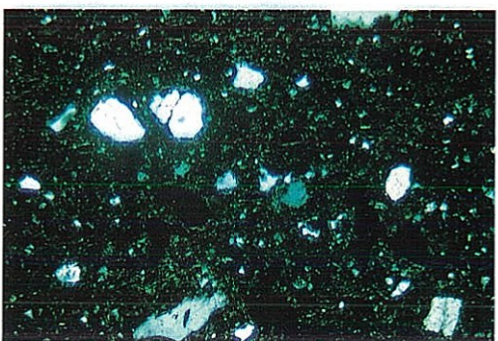
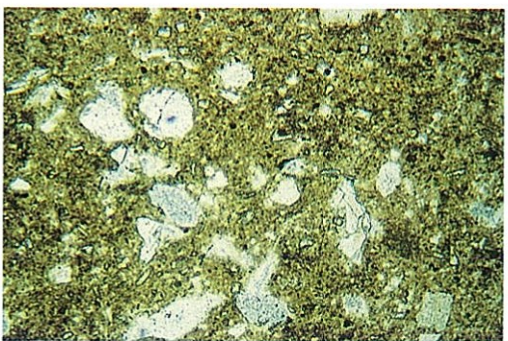
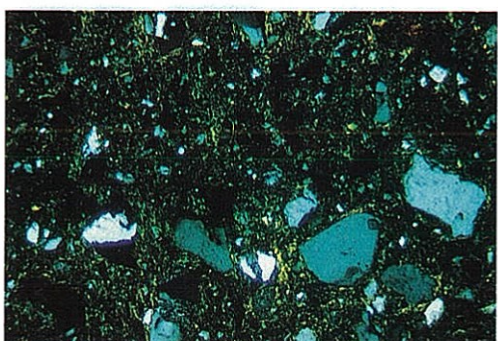
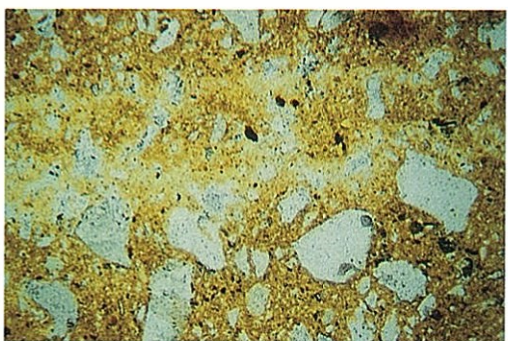
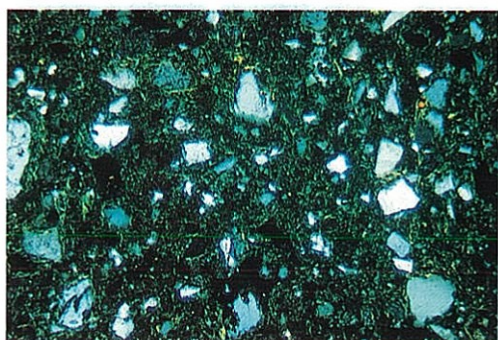
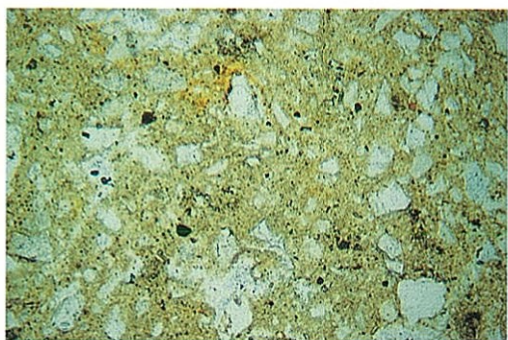
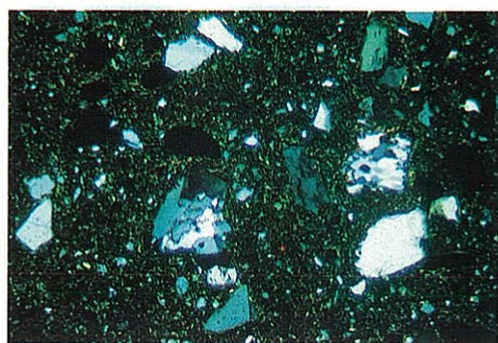
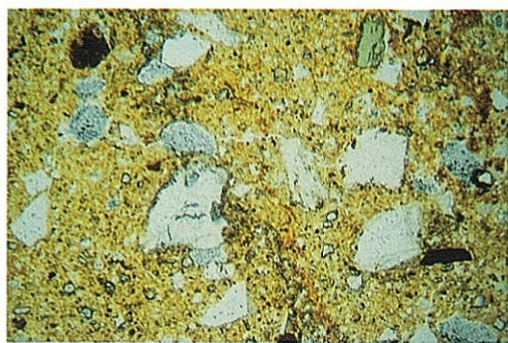
石英が多く、チャート、砂岩である。



試料番号30 (A-3, P-30)

石英が多く見られる。





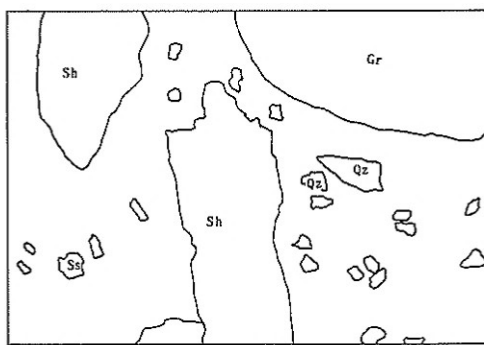
試料番号31 (A-3, P-31)

石英が多く、砂岩、チャート、斜長石、黒雲母である。石英には波動消光がみられる。



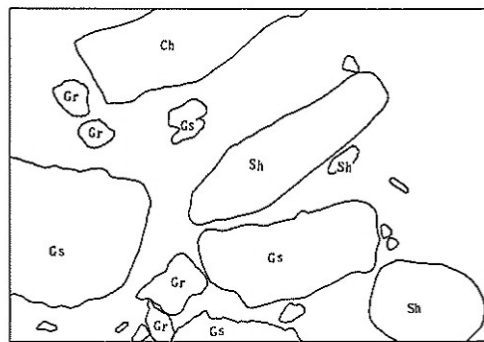
試料番号32A (A-3, P-32A)

円礫の石英とカリ長石がかみ合った岩片、片岩、砂岩、石英である。鉱物が一定の方向にのびている。



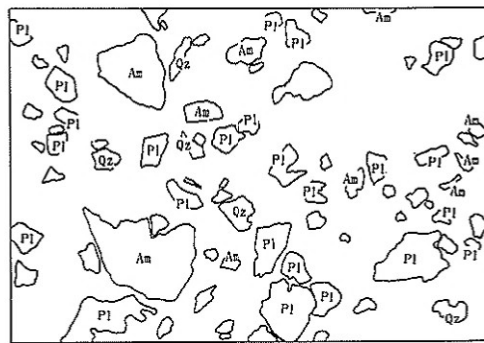
試料番号32B (B-2, P-32B)

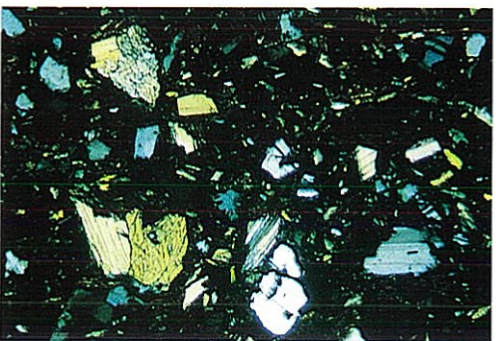
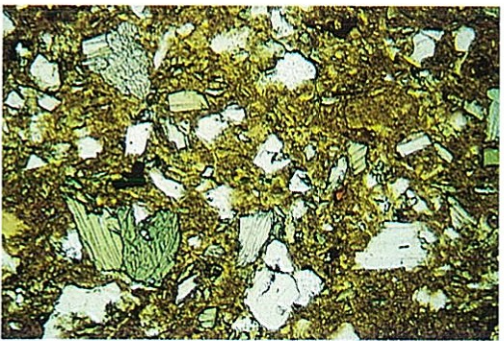
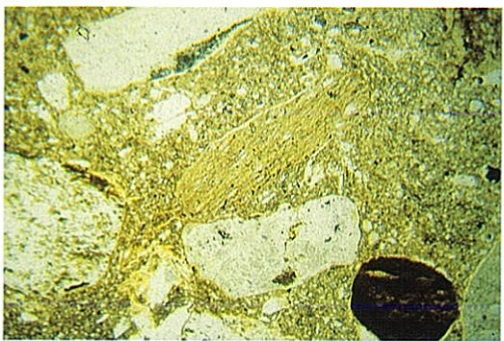
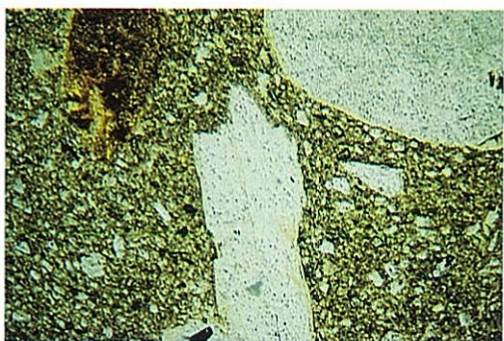
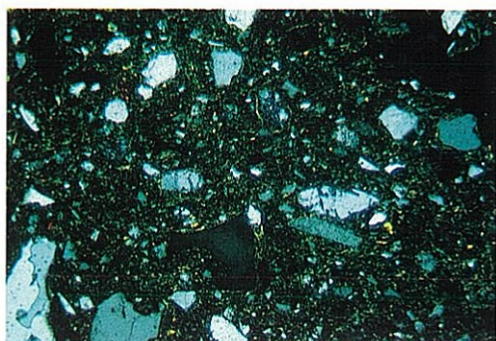
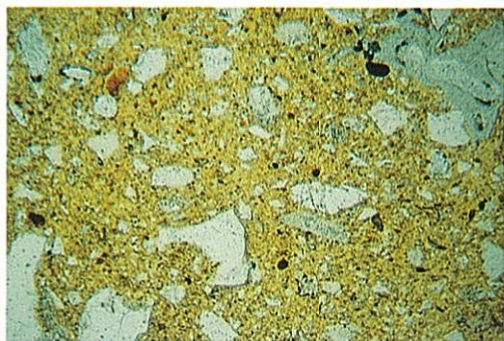
珪円礫の片麻岩、石英と長石がかみ合った岩片、黒雲母花崗岩、円礫の泥質片岩である。片麻岩や黒雲母花崗岩の石英には波動消光するものが多い。



試料番号33 (A-3, P-33)

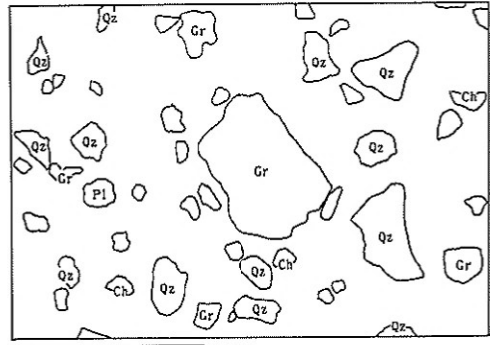
斜長石、角閃石が多く、石英は細かくて僅かである。斜長石はアルバイト双晶をなすものが多い。石英は波動消光を示す。





試料番号34 (A-3, P-34)

石英と長石がかみ合った岩片、石英、斜長石、チャートである。石英と長石がかみ合った岩片の石英や石英には波動消光を示すものが多い。



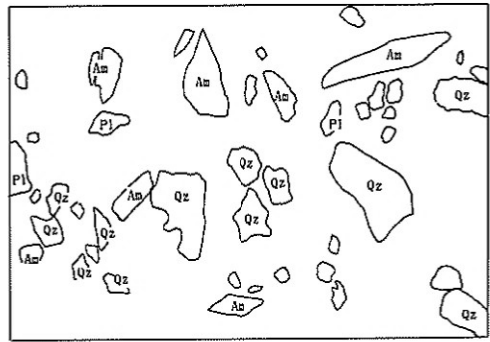
試料番号35 (A-3, P-35)

石英が多く、カリ長石、石英と長石からなる岩片である。石英には波動消光を示すものがある。



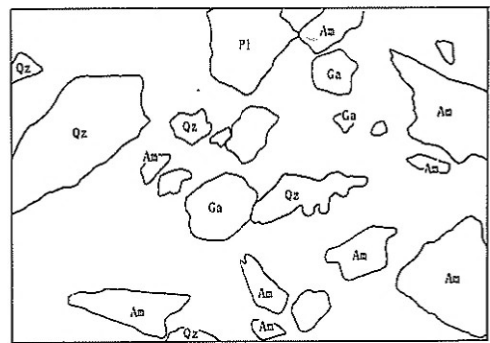
試料番号36 (A-3, P-36)

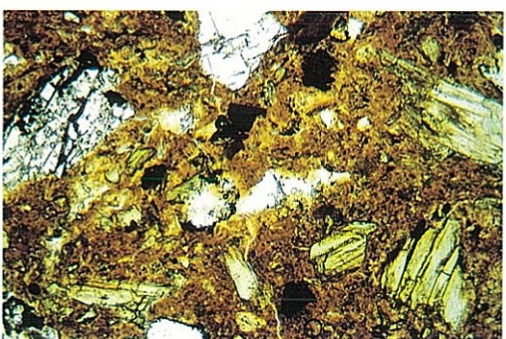
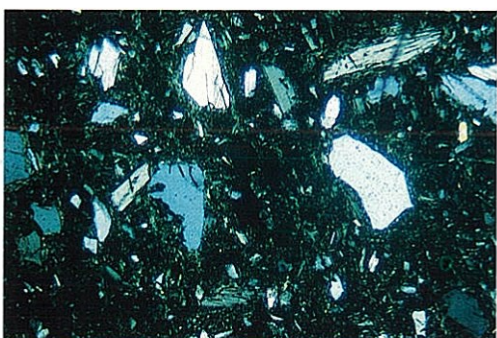
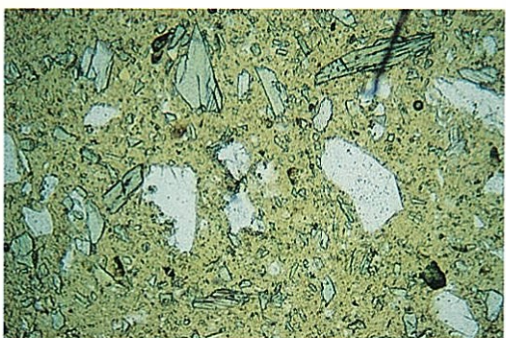
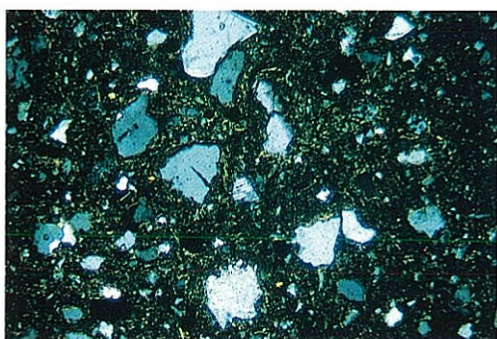
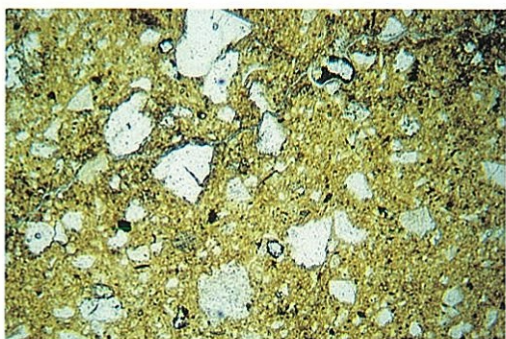
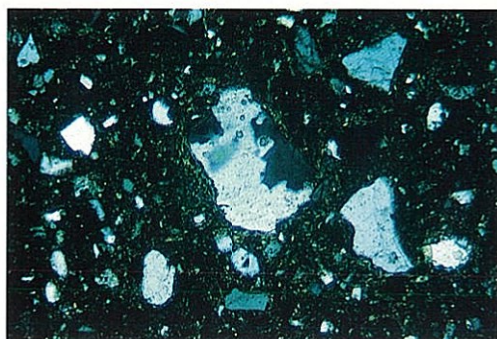
主として角が鋭い石英からなり、斜長石、角閃石からなる。石英には僅かであるが波動消光が認められる。



試料番号37 (A-3, P-37)

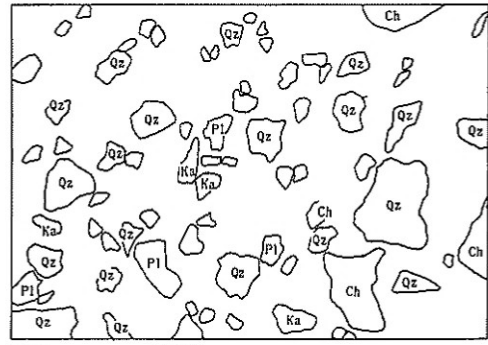
斑禰岩、石英、斜長石、角閃石である。石英は波動消光を示すものが多い。斜長石はアルバイト双晶を示すものがある。右下隅では角閃石の一部に橄欖石がみられる。





試料番号38 (A-3, P-38)

石英が多く、カリ長石、斜長石、チャートである。



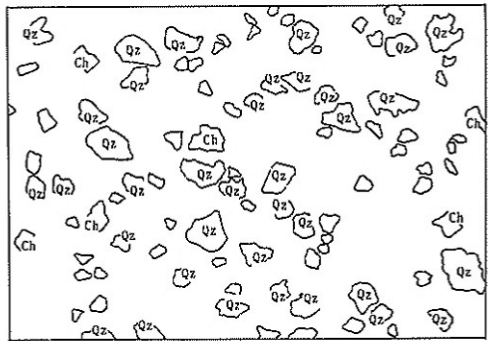
試料番号39 (A-3, P-39)

石英を主とし、斜長石、角閃石である。



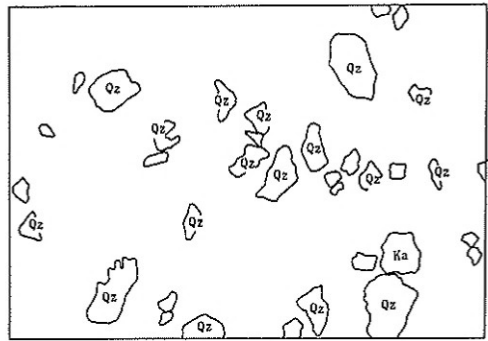
試料番号40 (A-3, P-40)

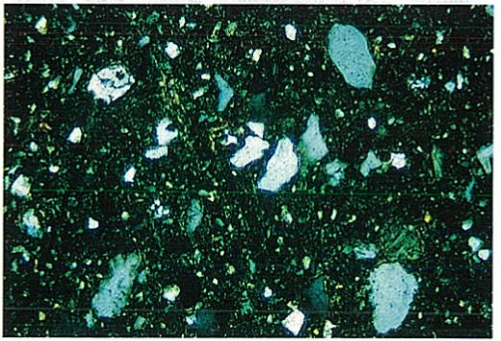
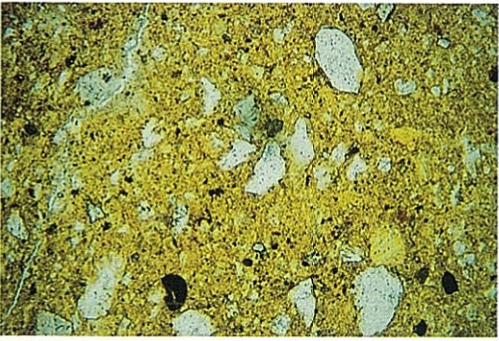
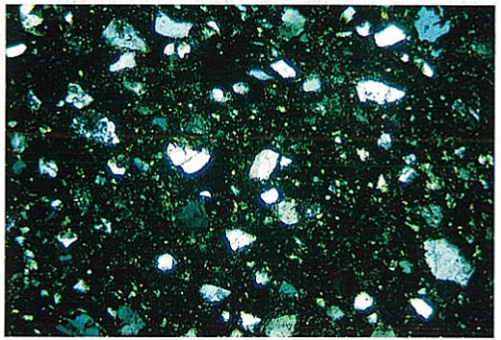
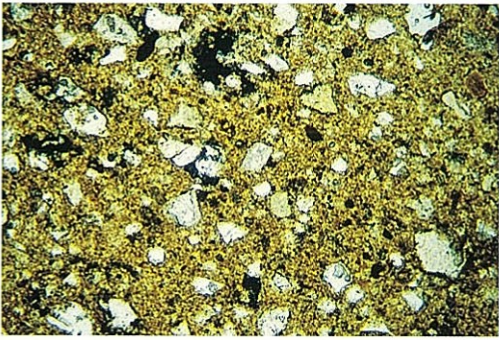
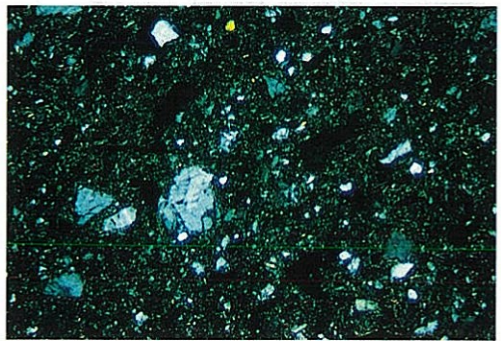
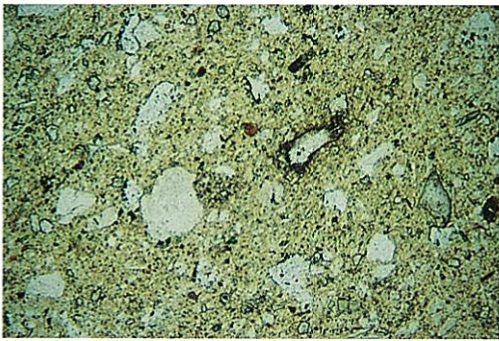
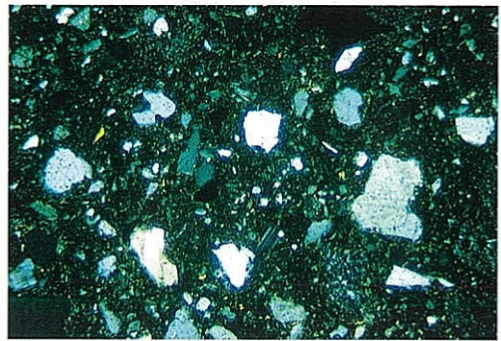
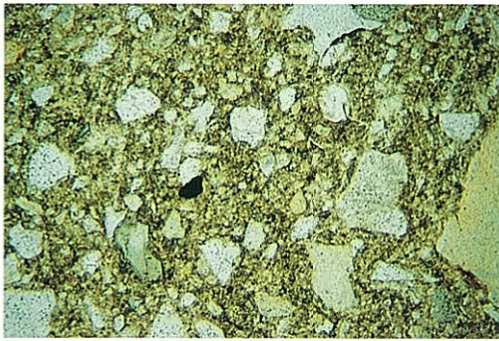
石英を主とし、チャートである。石英には波動消光がみられるものがある。



試料番号41 (A-3, P-41)

石英を主とし、カリ長石である。石英には波動消光を示すものがある。





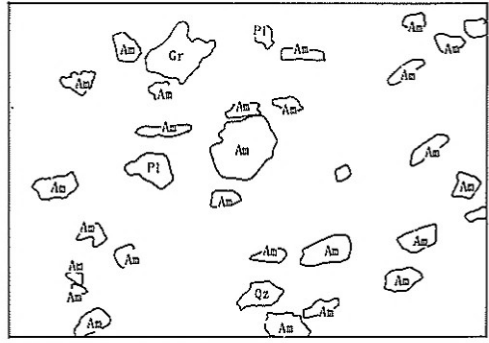
試料番号42 (A-3, P-42)

主として角閃石からなり、斜長石、石英である。角閃石には鋭い角が残っており、柱状を示す場合がごく僅かにある。



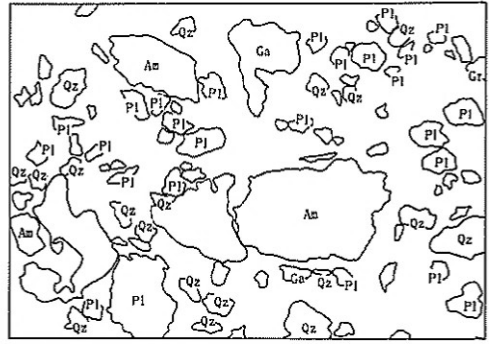
試料番号43 (B-2, P-43)

主として角閃石からなり、斜長石、石英、石英と長石がかみ合った岩片である。斜長石にはアルバイト双晶が見られる。



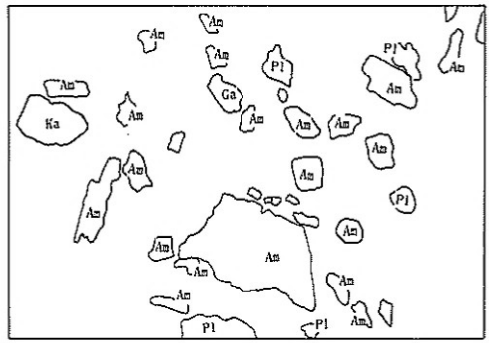
試料番号44 (B-4, P-44)

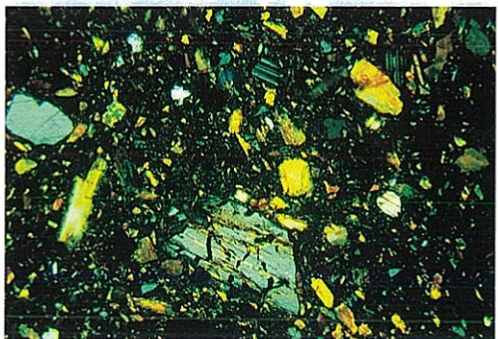
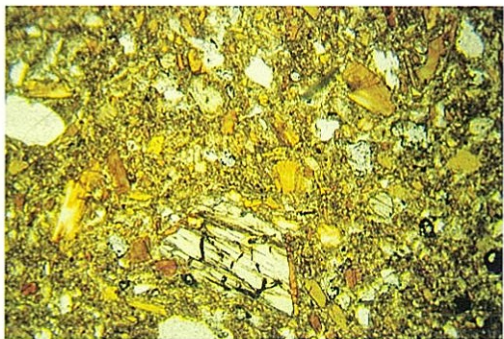
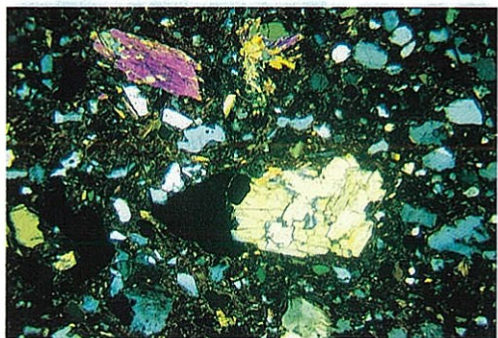
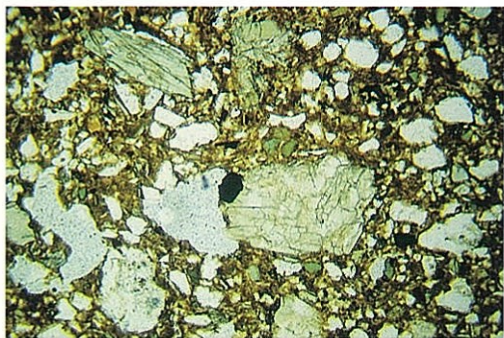
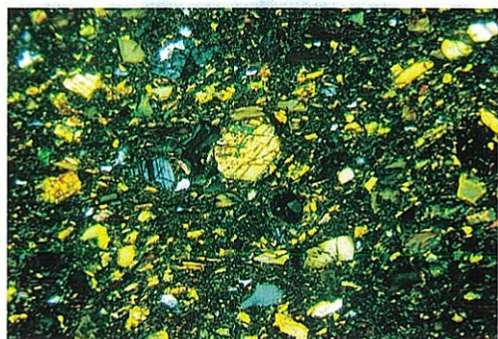
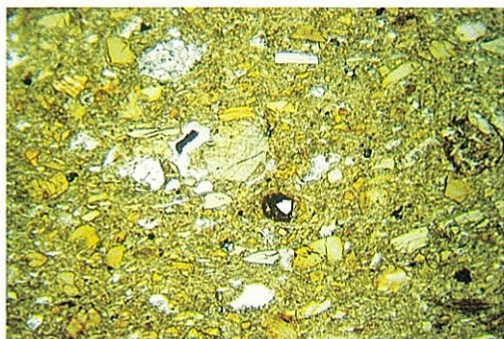
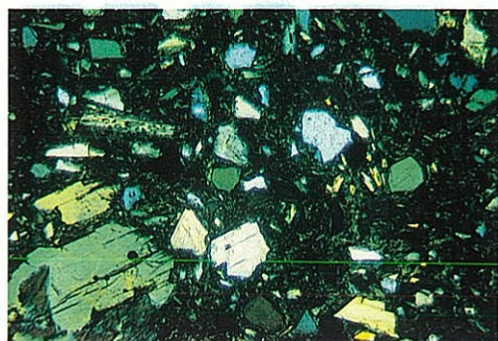
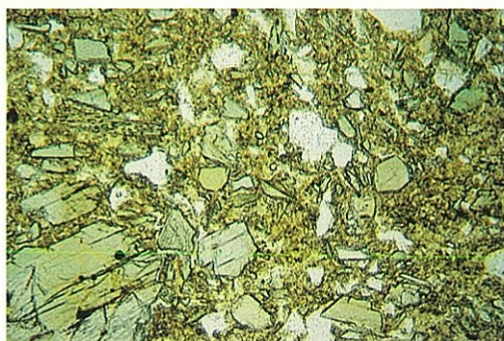
斑縞岩、石英とカリ長石がかみ合った岩片、石英、斜長石である。斜長石は多い。石英には波動消光を示すものがある。斜長石の多くはアルバイト双晶をなす。



試料番号45 (B-4, P-45)

角閃石が多く、斜長石、カリ長石、角閃石と斜長石がかみ合った岩片である。斜長石にはアルバイト双晶が見られる。





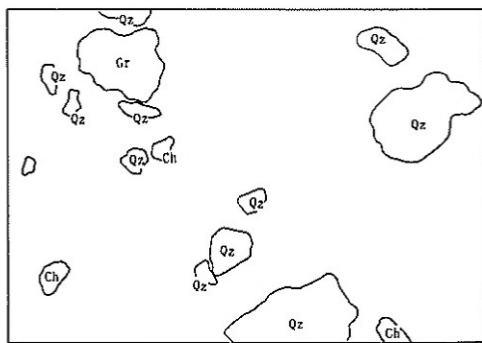
試料番号46 (B-4, P-46)

石英を主とし、カリ長石、斜長石、石英と長石がかみ合った岩片、チャートである。石英には波動消光を示すものがある。



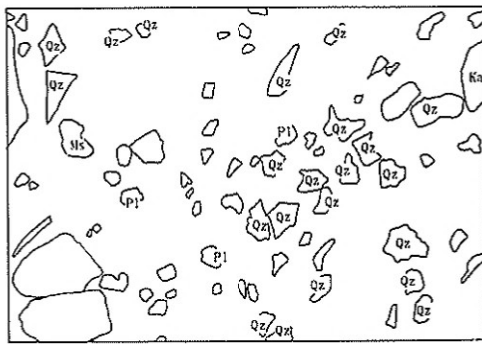
試料番号47 (B-4, P-47)

オープンニコル下では貝殻状の火山ガラスが多く見られる。石英が多く、チャート、石英と長石がかみ合った岩片である。石英には波動消光を示すものがある。



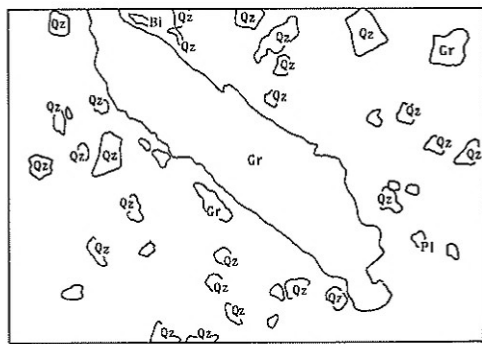
試料番号48 (B-4, P-48)

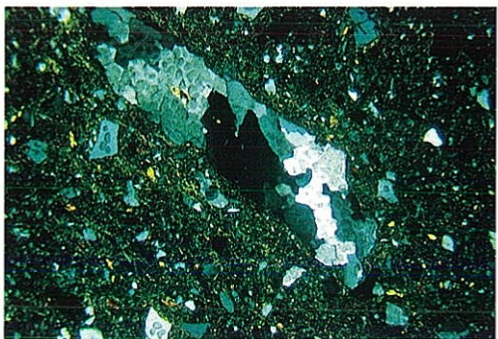
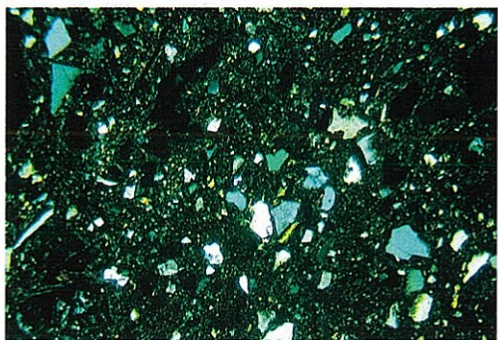
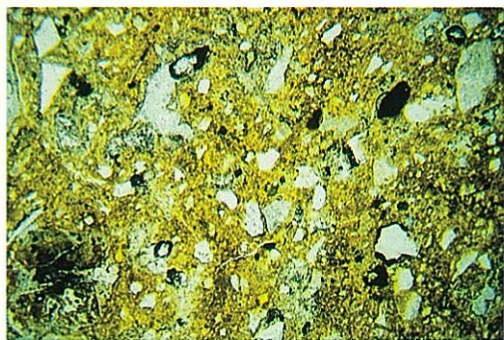
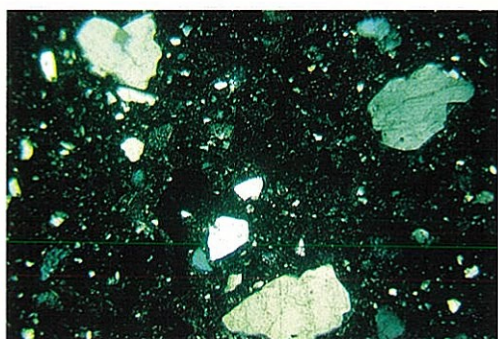
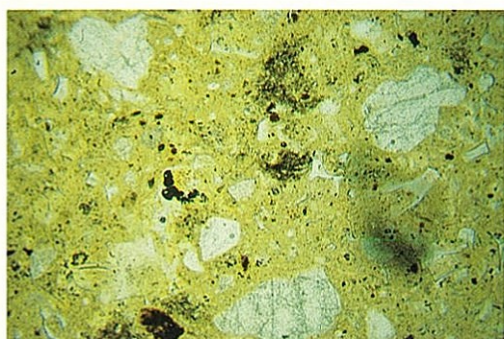
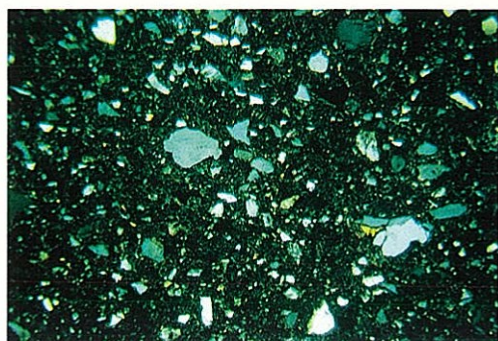
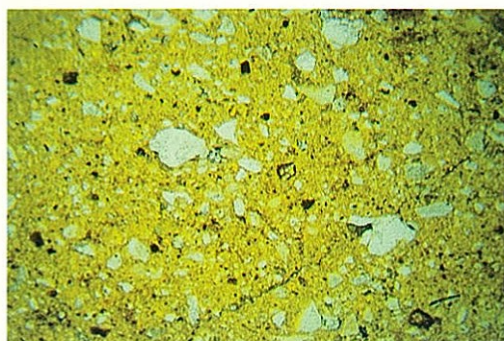
石英が多く、泥岩、カリ長石、斜長石、角閃石が僅かである。石英には波動消光を示すものがある。



試料番号49 (B-4, P-49)

主として角が鋭い石英からなり、僅かに花崗岩が含まれる。干渉色では黄色～茶かっ色をした細かい黒雲母が点在する。ごくごく僅かであるが、アルバイト双晶をなす斜長石がみられる。

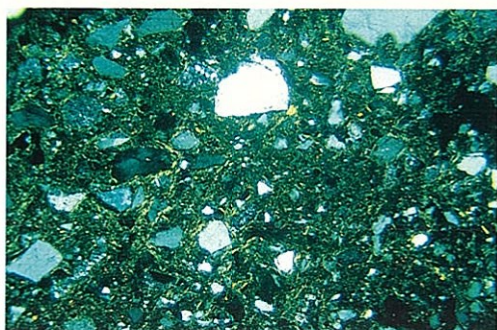
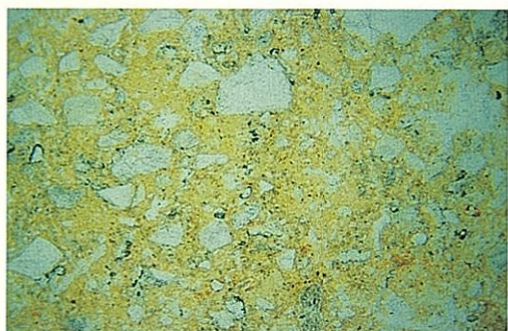




試料番号50 (B-4, P-50)

石英が多く、チャートである。チャートの円磨度は高い。





第5節 久宝寺遺跡出土の青銅製品

(財)大阪文化財センター 三好孝一

はじめに

久宝寺遺跡南地区第1調査区より二点の青銅製品が出土している。いずれも弥生時代中期の遺構に伴って出土したものであり、C地区の例は方形周溝墓の主体部埋土中より出土したもの、また、D地区出土の青銅製品は、特殊な性格を有すると考えられる土坑より出土した例で、大阪湾型銅戈を転用し、欠損部を研磨することにより刃部を作り出すという極めて特異なものである。これまで埋納遺構出土、あるいは採集された資料が多い中で、確実に土器などの遺物とともに共伴し出土した資料として注目に値するものと言えよう。

ここでは、これらの資料の観察を中心にのべることとし、あわせてこれまで出土した大阪湾型銅戈と比較した場合の位置づけについてものべることにしたい。

出土青銅製品

青銅製品のうち、C地区のものは1号方形周溝墓2号主体部内の埋土中より出土したものであるが主体部に伴うものかどうかは明らかではない。

厚さ1.5mm弱の扁平な青銅板の一边を鑿状の工具により敲打することにより切断したもので、切断された方向にゆくに従い薄さは増す。他の三辺は成形時のままでおわり、わずかに切断された反対側の長辺の稜部の一部分にのみ研磨あるいは敲打によって生じたと考えられる平滑な線状の面が形成されている。

表裏面には縦位の細い凹凸がみられ、色調は緑灰色を呈しているが、新鮮な破損面には純銅のような光沢が観察される。表面観察のみでは鬆や鑄損じのような鑄造の際に生じる様相は見られないが、鑄造品の鑄

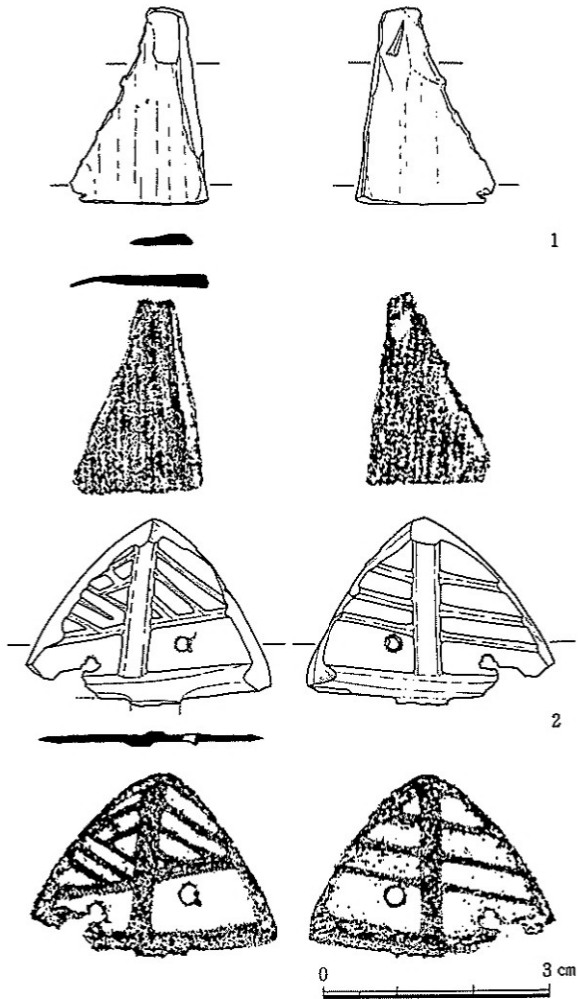


図1 久宝寺遺跡出土青銅製品

バリを切り落とした切片とも考えられる。

もう一点は、D地区の東方橋脚部分拡張トレンチであるD-2地区の土坑-15から出土したものである。二等辺三角形状を呈する偏平な青銅製品の二側縁を両面より研ぎ出すことにより刃部を形づくるもので、その用途は明確にはし難いが、形態からみて銅鏃になるかもしれない。

研磨が施されない下方の一辺がやや傾斜を持つこと、中央部の突線を介して双方に円穴を穿つこと、表と裏面に平行線と複合鋸歯紋を陽出した部分が残存していることから、所謂大阪湾型銅戈の範疇に含まれる青銅製利器を転用して制作されたものと考えられる。

大阪湾型銅戈として考えて見てゆくならば、右側の紐掛穴は铸造後裏面より穿孔し直され、左側の紐穴は湯まわりが悪く後補の穿孔が行われているのか明確には出来ない。

残存部のみをみた場合鋳掛けなどの補修は認められず鋳放しのままである。茎は関部で幅7mmをはかり、それ以下は欠損し痕跡を止めるにすぎない。下端部は鋳バリを切除したのち面取が施されている。樋の部分には中央部と下端部に突線を陽出し、その両側には複合鋸歯紋が施されている等の特徴を見出すことができる。

また、この大阪湾型銅戈のもう一つの大きな特徴は、表裏とも各々紋様の違う鋳范により製作されたもので、表側の紋様は横線で区画した後直ちに複合鋸歯紋を配するのに対し、裏面では通常見られるような平行線を鋳出した後、複合鋸歯紋を配する紋様構成をもつと見られることである。

表面は暗緑灰色を呈する部分と藍色及び鉄分の沈着したと思われる褐色の部分が見られる。また、鬆が何箇所も見られる。

大阪湾型銅戈の類例

ここでは、これまでに出土した大阪湾型銅戈の集成と比較を行ってみたい。現在までに出土した大阪湾型銅戈の類例は今回の出土例を含めて、兵庫県2遺跡8例、大阪府3遺跡3例、和歌山県1遺跡6例の計6遺跡17例である（表-1）。

多くは埋納品を不時発見したもの、あるいは採集品であり出土状況の明確なものは少ない。また、一括埋納された例が2遺跡13例をかぞえる。

これらの例を最も古いとされる和歌山県有田市箕島町上ノ段遺跡出土例をa類、兵庫県神戸市灘区桜ヶ丘遺跡出土例をb類、兵庫県東灘区本山町保久良神社出土例をc類とする従来の型式分類¹⁾にあてはめてみるならば、上記の出土例の他、大阪府高槻市大塚町大塚遺跡出土例²⁾はb類、大阪府東大阪市若江西新町瓜生堂遺跡出土例³⁾はc類にあてはめられるとされ、今回の久宝寺遺跡出土例も詳細は不明ながらもc類に該当すると考えられる。

これらのうち、鋳型から取り出した製品の紐掛穴部分に対して円孔を穿つという製作技法からみて久宝寺遺跡出土例は、瓜生堂遺跡出土例に最も近似していると考えられる。

このほかに製品ではないが、大阪府茨木市奈良町東奈良遺跡より大阪湾型銅戈b類の土製鋳范が出土している⁴⁾（表2）。

表1 大阪湾型銅戈出土地一覧

No	府県名	遺跡名	遺構	伴出品	型式	時期	備考
1	兵庫	桜ヶ丘遺跡	埋納坑	銅鐸14 外縁付鈕式4 扁平鈕式 10	b		
2					b		
3					b		
4					b		
5					b		
6					b		
7					b		
8		保久良神社	包含層	土器・石器	c	中期中葉～後期	
9	大阪	大塚遺跡			b		採集品
10	大阪	瓜生堂遺跡	自然河川		c	中期後半	
11	大阪	久宝寺遺跡	土坑	土器・モミ	c	中期末	
12	和歌山	上ノ段遺跡		付近より銅鐸が 出土	a		
13					a		
14					a		
15					a		
16					a		
17					a		

表2 大阪湾型銅戈鎔范出土地一覧

A	大阪	東奈良遺跡	包含層	銅戈鎔范3 銅鐸鎔范15 外縁付鈕式鎔范3 扁平鈕式鎔范1、 他破片11 勾玉鎔范2	b	中期前半～庄内	
---	----	-------	-----	---	---	---------	--

共伴遺物

以上の類例のうち共伴遺物の存在するものが若干みられる。a類6点がまとまって検出された上ノ段遺跡出土例では、銅戈が出した地点よりやや離れた位置から江戸時代に銅鐸が採集されていることが伝えられている。

桜ヶ丘遺跡出土例b類7点は外縁付鈕式の銅鐸4点、扁平鈕式の銅鐸10点が共伴していることが報告されている。

保久良神社出土例c類は中期中葉から後期の遺物とともに出土している。

瓜生堂遺跡出土例c類は、中期第II遺構面から切り込まれた河川堆積最上層より出土し、同一面より出土した土器ならびに、これらを覆う包含層に対応する土層出土の土器からみて中期後半頃に属する遺物と考えられる。

久宝寺遺跡出土例c類は土坑の埋土中から出土し、共伴した土器より中期末に比定される。この土坑の形状、出土遺物等については本文中に詳しいが、朱彩を施した土器の出土、完形土器の出土、多量の穂首刈りされたままの稲穂が出土していることから、非常に特殊な状況を表していると考えられ、通常一般に土坑とされる遺構とはやや性格を異とし祭祀の様相が強いのことが言えよう。

このように見てきた場合、ほとんどの例は後に破損した状態で出土しているか、全形を窺える状態で出土していることに對し、久宝寺遺跡出土例は明らかに転用を受けた二次的製品として出土していることが注意される。すなわち、久宝寺遺跡出土例からみて最も新しい形式とされる大阪湾型銅戈c類は中期末には実戦用ではない青銅器あるいは武器型祭器の機能をすでに失い、銅の素材のみを活かした利器としての転用をうけていることが考えられる。これらの状況より大阪湾型銅戈は中期末には本来の機能を停止し、これらが鋳造された後、一定期間使用された時期もおのずと、中期後半以前に限定できうる可能性が生じてくる。以上のように考えられるならば、これまで単独出土、あるいは共伴遺物が少なく、また、一括埋納という製作されてから埋められる時間的経過が不明瞭であった大阪湾型銅戈が多いなかで、久宝寺遺跡出土例がその本来の目的を持ち製作、使用された時期の終焉を知る上での貴重な資料となることは揺るぎ得ない立場をとることとなる。

まとめにかえて

久宝寺遺跡出土の大阪湾型銅戈に対して、湯まわりが悪い部分に鑄掛けが施されていない部分が存在していることから、鑄造の際の失敗品を他の青銅製利器に転用してしている可能性を完全に払拭することが出来ないが、青銅製品をほとんど本来の原形を止め得ぬまでに再加工し、さらに刃部を形成しているという例を見ない現在、また、鑄造後の紐掛孔部分に瓜生堂遺跡出土例に見られるような補修が施される事実を重視し、完成品として使用された時期が存在したという仮定が許されるならば、以下のことが考えられる。

久宝寺遺跡出土大阪湾型銅戈c類は中期末にはすでにその本来の機能を失ってしまっているうえに、さらに別の青銅製利器として転用されていることは先にも述べた。このことは当時の人々が、非常に扁平であり、刃部が研ぎ出されていないことから非実戦用具とされる大阪湾型銅戈c類を取り扱う際、この時期すでにその本来の意義が失われ、銅戈に対する意識が大きく変化してしまっている状況を如実に表していると言える。また、このような状況より大阪湾型銅戈c類が鑄造された年代の下限を土坑より共伴した土器より中期後半以前に限定できるという結果が導き出される。

以上、非常に簡単ではあるが久宝寺遺跡出土の青銅製品2点についての検討を加えた。この内、従来、時期の把握に対し決定の手段を頼る術が乏しかった大阪湾型銅戈が多い中で、久宝寺遺跡より出土した新例は、時期の限定できる遺構内より出土し、かつ転用を受けているという点でその持つ意義は非常に大きいということを述べてまとめにかえたい。

註

1. 三木文雄「大阪湾型銅戈について」『ミュージアム』223 1969年。
2. 迂路行驢子「高槻市大塚町地先の淀川床遺跡出土銅戈 一戈矛類の用例も併せて一」『大阪文化誌』第三巻第二号 財団法人大阪文化財センター 1976年。
3. 大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター『瓜生堂』近畿自動車路天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 1980年。
4. 田代克己他「東奈良遺跡出土の銅鐸銘范について」『考古学雑誌』第61巻第1号 1975年。
5. 梅原末治『銅鐸の研究』 1927年。
6. 『桜ヶ丘銅鐸・銅戈調査報告書(本編)』兵庫県教育委員会 1969年。
7. 樋口清之「摂津保久良神社の研究」『史前学雑誌』第11巻第2・3号 1942年。

財団法人	
大阪府埋蔵文化財協会蔵書	
第 05086 号	
()	

久宝寺南
(その1)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和62年3月31日発行

編集著作
発行者

財団法人 大阪文化財センター
大阪市城東区蒲生2丁目10番28号

印刷所

株式会社 中島弘文堂印刷所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号



1. The first part of the document discusses the importance of maintaining accurate records of all transactions. This is essential for ensuring the integrity of the financial data and for providing a clear audit trail. The second part of the document outlines the various methods used to collect and analyze this data, including the use of specialized software and manual review processes. The third part of the document provides a detailed overview of the results of the analysis, highlighting key trends and areas of concern. Finally, the fourth part of the document offers recommendations for improving the overall efficiency and accuracy of the reporting process.

